浜松城跡 5 次

2011 年 3 月

（財）浜松市文化振興財団

例　言

1　本書は浜松市中区元城町で実施した浜松城跡の発掘調査にかかわる報告である。当発掘調査は浜松城跡の遺構残存状況を確認するために実施した。

2　浜松城跡は、過去において4次にわたる発掘調査と、数回にわたる工事立合いを実施してきた。このため、当発掘調査を浜松城跡の5次発掘調査とする。従来の調査成果は、浜松市教育委員会1996『浜松城跡―考古学的調査の記録―』、（財）浜松市文化振興財団2010『浜松城跡4次』に掲載している。

3　当発掘調査は、平成21年（2009）3月に浜松市公園緑地部公園課が策定した浜松城公園歴史ゾーン整備基本構想において遺構残存の可能性が高いと判断された天守門跡および富士見櫓跡について、復原の可能性や復原方法を検討することを目的に実施した。調査は、浜松市（主管：公園緑地部公園課）の委託により、浜松市教育委員会の指導（浜松市文化財課が補助執行）のもと、財団法人浜松市文化振興財団が行った。

4　当発掘調査にかかわる契約期間は平成22年（2010）4月15日から平成23年（2011）3月10日までである。このうち現地発掘調査は、平成22年（2010）5月17日から6月11日の間に実施した。調査面積は85㎡である。

5　現地発掘調査は鈴木一有、影山重広（浜松市文化財課）が担当し、吉田悠歩（浜松市文化振興財団非常勤職員）、原田和子（浜松市文化財課非常勤職員）が補助した。

6　整理作業は鈴木一有が担当し、吉田悠歩、原田和子の補助を得た。本書の執筆、編集は、鈴木一有が行った。

7　調査の記録、出土遺物は浜松市文化財課が保管している。

8　本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海抜高である。

9　本書では参考文献等の表記において以下のような略称を用いる。
教育委員会→教委、（財）浜松市文化振興財団→浜文振

10　本書の巻末に浜松市教育委員会が平成4年（1992）度から平成8年（1996）度に実施した浜松城石垣にかかわる写真測量の成果を掲載した。

11　本書の作成にあたり、加藤理文、三浦正幸、向坂鋼二各氏の協力を賜った。

浜松城跡５次

目　　次

例　　言

第１章　序　論 …… 1

第２章　天守門跡の調査 …… 5

第３章　富士見櫓跡の調査 …… 17

第４章　総　括 …… 21

付　　図 …… 30

図　　版

図　版　目　次

1　天守門跡北地区（北西から）
2　1　天守門跡南地区（南から）
　　2　天守門跡南地区根石列（南西から）
　　3　天守門跡南地区根石列（北東から）
3　1　天守門跡北地区（北から）
　　2　天守門跡北地区根石列（西から）
　　3　天守門跡北地区遺物出土状況（北から）
4　天守門跡完掘状況（南から）
5　富士見櫓跡北側石垣（西から）
6　天守門跡出土遺物
7　富士見櫓跡出土遺物

挿　図　目　次

Fig.1　浜松城跡の位置 …… 1
Fig.2　浜松城下町の構成 …… 2
Fig.3　浜松城跡復元図 …… 3
Fig.4　調査区位置図 …… 4
Fig.5　天守門跡全体図 …… 6
Fig.6　天守門跡南地区検出遺構 …… 7
Fig.7　天守門跡南地区遺物出土状況 …… 8
Fig.8　天守門跡北地区検出遺構 …… 9
Fig.9　天守門跡北地区遺物出土状況 ……10
Fig.10　天守門跡南地区出土遺物（1）……12
Fig.11　天守門跡南地区出土遺物（2）……13
Fig.12　天守門跡北地区出土遺物（1）……14
Fig.13　天守門跡北地区出土遺物（2）……15
Fig.14　天守門跡北地区出土遺物（3）……16
Fig.15　富士見櫓跡検出遺構 ……18
Fig.16　富士見櫓跡出土遺物（1）……19
Fig.17　富士見櫓跡出土遺物（2）……20
Fig.18　天守門復元図 ……22
Fig.19　富士見櫓復元図 ……23
Fig.20　出土品の年代 ……26
Fig.21　浜松城石垣実測図（1）……31
Fig.22　浜松城石垣実測図（2）……32
Fig.23　浜松城石垣実測図（3）……33
Fig.24　浜松城石垣実測図（4）……34
Fig.25　浜松城石垣実測図（5）……35
Fig.26　浜松城石垣実測図（6）……36
Fig.27　浜松城石垣実測図（7）……37
Fig.28　浜松城石垣実測図（8）……38
Fig.29　浜松城石垣実測図（9）……39
Fig.30　浜松城石垣実測図（10）……40
Fig.31　浜松城石垣実測図（11）……41

挿　表　目　次

Tab.1　浜松城跡出土丸瓦における諸属性 ……25
Tab.2　出土遺物観察表 ……29

第1章　序　論

1　調査にいたる経緯

静岡県浜松市中区に所在する浜松城跡は、天守曲輪を中心とする中枢部が浜松市指定史跡として保護されてきたが、近年、城跡の歴史的な魅力を向上させる機運が高まっている。2009年に策定された浜松城公園歴史ゾーン整備基本構想（主管：浜松市公園緑地部公園課）では、史実に忠実な建物が復原できる施設として天守門と富士見櫓がとりあげられた。この構想のもと、両者の埋没遺構を確認するため、2009年に発掘調査（４次調査）を実施した。この調査では二箇所ともに建物の礎石を確認したが、正確な建物復原にいたるため、天守門跡については二階部分にあたる石垣上部、富士見櫓跡については４次調査地の西側部分について、さらなる発掘調査の必要性が指摘された。

こうした経緯を受け、浜松市公園課と浜松市文化財課が該当部分の取り扱いについて協議を重ね、2010年、天守門跡と富士見櫓跡の二箇所において、遺構の残存状況を確認するための範囲確認調査を実施することが決定された。発掘調査は（財）浜松市文化振興財団が受託し、浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）が指導にあたった。現地調査は2010年の５月17日から６月11日にかけて実施した。調査面積は、天守門跡南地区45㎡、同北地区25㎡、富士見櫓跡15㎡の合計85㎡である。

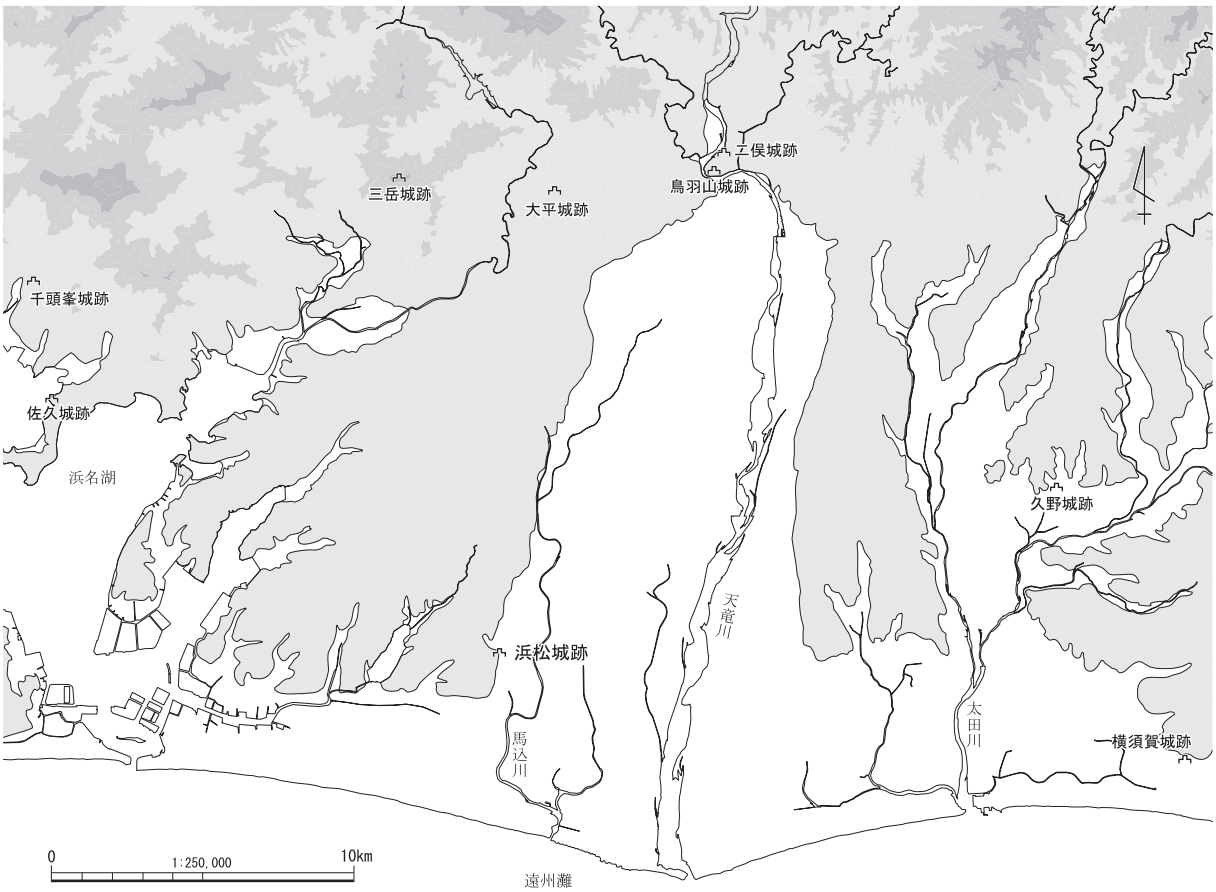


Fig.1　浜松城跡の位置

2　浜松城の位置と調査経過

浜松城の立地　静岡県西部地方には、戦国時代から安土桃山時代にかけて築城、使用された城郭が高密度に分布している。これら城郭群の中でも浜松城は平野部に近く、経済的な中心地に立地している。浜松城の前身は15世紀頃に築かれた引馬城であり、16世紀後葉には徳川家康によって現在の本丸側に城域が拡張され、浜松城と呼ばれるようになった。徳川家康が関東に移封された16世紀末には、豊臣系の大名である堀尾吉晴が入城し、石垣や天守を備えた近世的な城郭としてその姿が一新された。現在、天守曲輪や本丸にみる石垣の多くは、この時に構築されたものを母体としているとみられる。江戸時代になると徳川譜代の城として利用され、明治時代を迎えている。江戸時代の初めには三の丸が整備され、城域の整備がさらに進んだとみられる。

浜松城を中心として形成された城下町は、現在も地割りなどに名残を留めている。浜松城下町は16世紀後葉に建設が始まり、江戸時代の初めにその形態が整った。浜松城下町は浜松城の大手門から南に伸びる大手筋を基軸に発展を遂げ、その周囲に広がっている。近世には、城下町内の利用地が固定化され、１）浜松城内とその周辺を取り囲む武家地、２）東海道沿いに開発された町人地、３）城下町の縁辺部に集約された寺社地といった区分けが明確にされた。

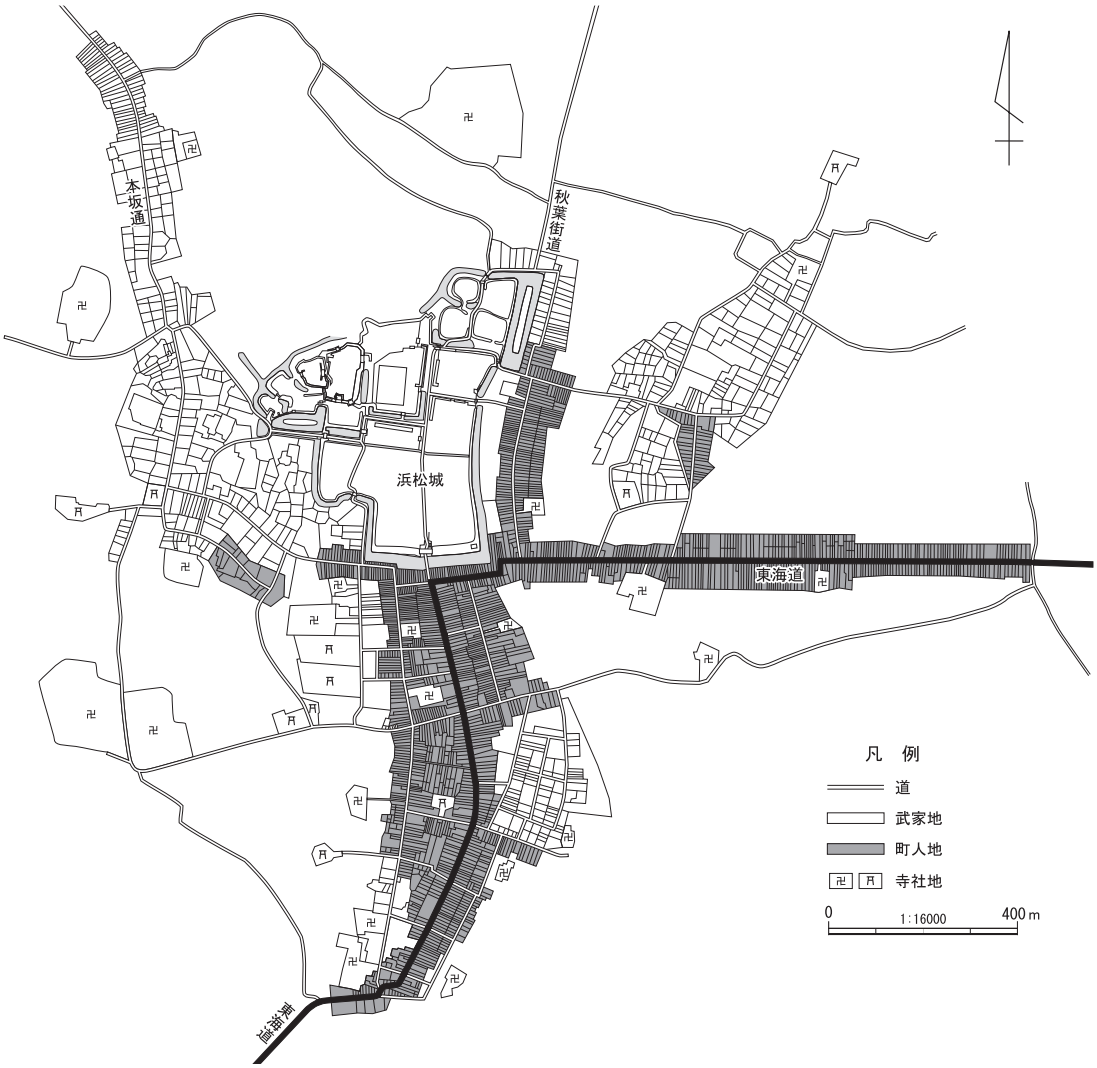


Fig.2　浜松城下町の構成

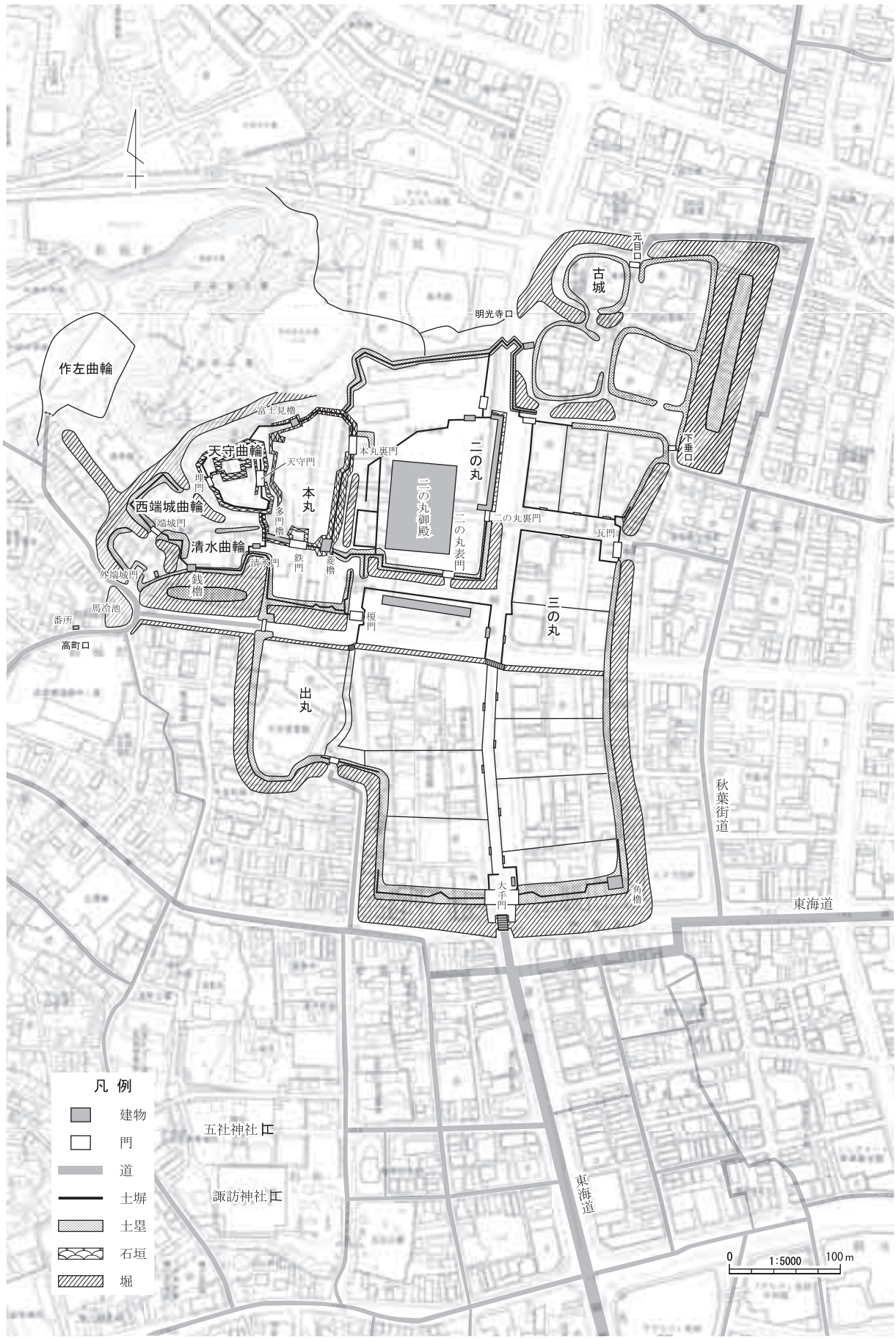


Fig.3　浜松城跡復元図

調査履歴　過去に実施した浜松城跡にかかわる発掘調査等は、1996年に浜松市教育委員会が刊行した報告書（浜松市教委1996）、および、2009年に実施した４次調査の報告書（浜文振2010）に示されている。今回の発掘調査（５次調査）は、天守門跡と富士見櫓跡の二箇所のうち４次調査を補足する地点を対象とした。

発掘区設定　天守門跡は、櫓門の二階部分における基礎構造の解明を目的に、南および北の石垣上部に発掘区を設定した。南側の調査区については、櫓門の外側に巡る土塀の構造を把握することも視野に入れ、石垣上端に沿った部分も調査対象に入れた。富士見櫓跡については、４次調査で未発掘となっていた北西部と南西部を補足的に調査した。なお、両調査区とも、浜松城公園内に設けられた基準点をもとに、国家座標に合わせた測量を実施している。

調査経過　天守門跡では、近現代の整地層を撤去した後、基礎構造の石列が埋没している層位まで掘り下げ、埋没遺構の確認に努めた。南北の調査区ともに、櫓門の基礎にかかかわる石列を確認した。また、土塀そのものの痕跡は確認できなかったが、塀瓦の出土位置からおおよその土塀の位置を推定することができた。天守門跡の調査期間中、2010年５月28日には、専門委員による現地指導があり、調査成果に対する助言が寄せられた。富士見櫓跡については、部分的な調査にとどまったが、北側石垣が折れ曲がる状況を確認し、石垣外側の埋没土中から遺物が豊富に出土した。

現地説明会　2010年５月30日には、現地説明会を開催した。当日は晴天に恵まれ、620名もの見学者を迎えることができた。

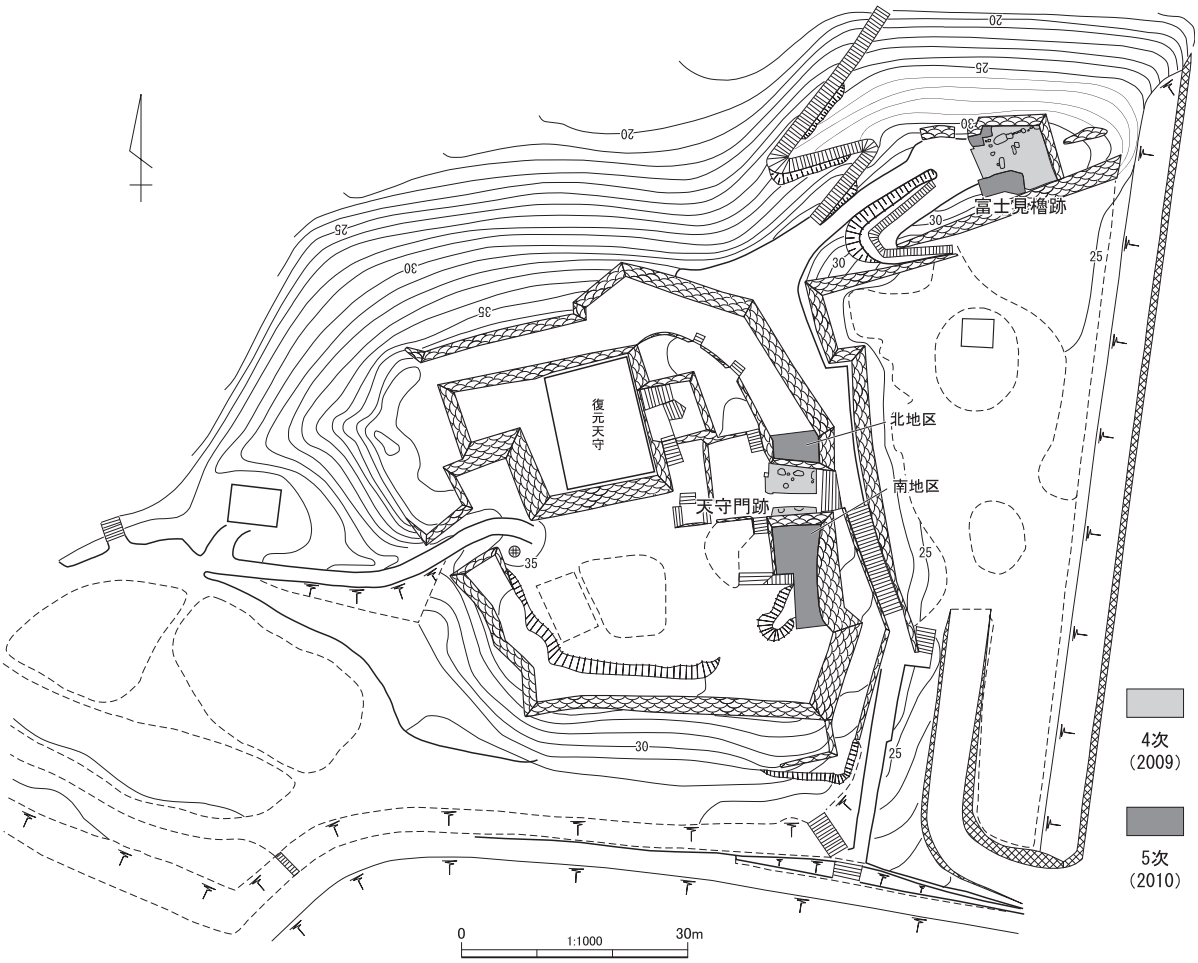


Fig.4　調査区位置図

第２章　天守門跡の調査

１　検出遺構

概　要（Fig.5）2009年の４次調査において、天守門の一階部分の礎石など基礎構造を確認した。今回の調査では、櫓門とみられる天守門の二階部分の規模解明を目的に、石垣上面の南北双方において発掘調査を行った。両調査区とも遺構の遺存状態は良好とはいえないものの、櫓門の基礎構造にかかわる根石列を確認し、櫓の規模を推し量る材料を得た。

天守門跡南地区（Fig.6）天守門跡の石垣上面の南側において、南北13.5m、東西5.5mほどの発掘調査区を設定した（調査面積は45㎡）。この調査区を天守門跡南地区と呼称する（以下、南地区と略す）。

調査区全体に削平、攪乱がおよんでおり、南側では攪乱された土坑（SK01）がみられる。現地表面下約50㎝の深さにおいて、櫓門の基礎構造とみられる根石列を検出した。とくに西側の根石（Fig.7に拡大図示）は上面が偏平で、あたかも礎石のような形態である。当該部分では扁平な石が南北に２石分並んでいたが、その理由は不明である。この根石より東側で確認できた石列はいずれも、充分に据えられた状態でない。本来あった場所から移動している可能性も考えられる。

土塀の痕跡は確認できなかったが、根石列よりも南側で土塀に用いた塀瓦（目板瓦、23・24など）が集中的に出土した。塀瓦の出土位置は土塀と櫓門の境界を示す要素と捉え、天守門跡の発掘調査では出土位置をすべて記録した。Fig.6に示すとおり、塀瓦は櫓門の根石列より内側（北側）から出土することはほとんどなく、大部分が根石列の外側（南側）から出土している。塀瓦の出土位置は、櫓門の根石列の検出位置と整合的であることが分かる。また、根石列の南側において、剥落した漆喰とみられる乳白色の粒子が多くみられた。乳白色の粒子は櫓門の内側にあたる根石列の北側では全く見られないことから、外壁の漆喰が剥落し土中に埋もれたものと想定できる。この特徴も櫓門の規模を想定する要素として注目できるだろう。

櫓の根石列を検出した面において、瓦が多く出土した（１～24）。とくに、西側の偏平な根石を確認した部分においては、遺存部分が大きい個体が集中して出土した（Fig.7）。また、先述のとおり、調査区の南側では塀瓦が豊富に出土している。

天守門跡北地区（Fig.8）天守門跡の石垣上面の北側において、南北４m、東西６mほどの発掘調査区を設定した（調査面積は25㎡）。この調査区を天守門跡北地区と呼称する（以下、北地区と略す）。南地区同様、調査区全体に削平や攪乱がおよんでいる。西側では電灯およびその配電盤設置坑があるほか、北東側では攪乱された土坑（SK11）もみられる。調査区の南東側において、櫓門の基礎構造とみられる根石列を検出した。

根石列は乱れが著しく、いずれも元の位置をとどめていないとみられる。ただし、石列は東西方向に直線的に並んでいること、根石列から軒平瓦や鯱瓦などが豊富に出土したことから、本来あった場所から大きくは動いていないと判断できる。

根石列に混じって遺物が豊富に出土した（Fig.9）。鯱瓦（33・34）や鬼瓦（35）は、天守門に伴う可能性が高いものである。また、南地区と同様に塀瓦の出土位置を記録した。塀瓦は根石列よりも外側（北側）に集中する傾向がみられ、土塀の位置を想定することが可能である。

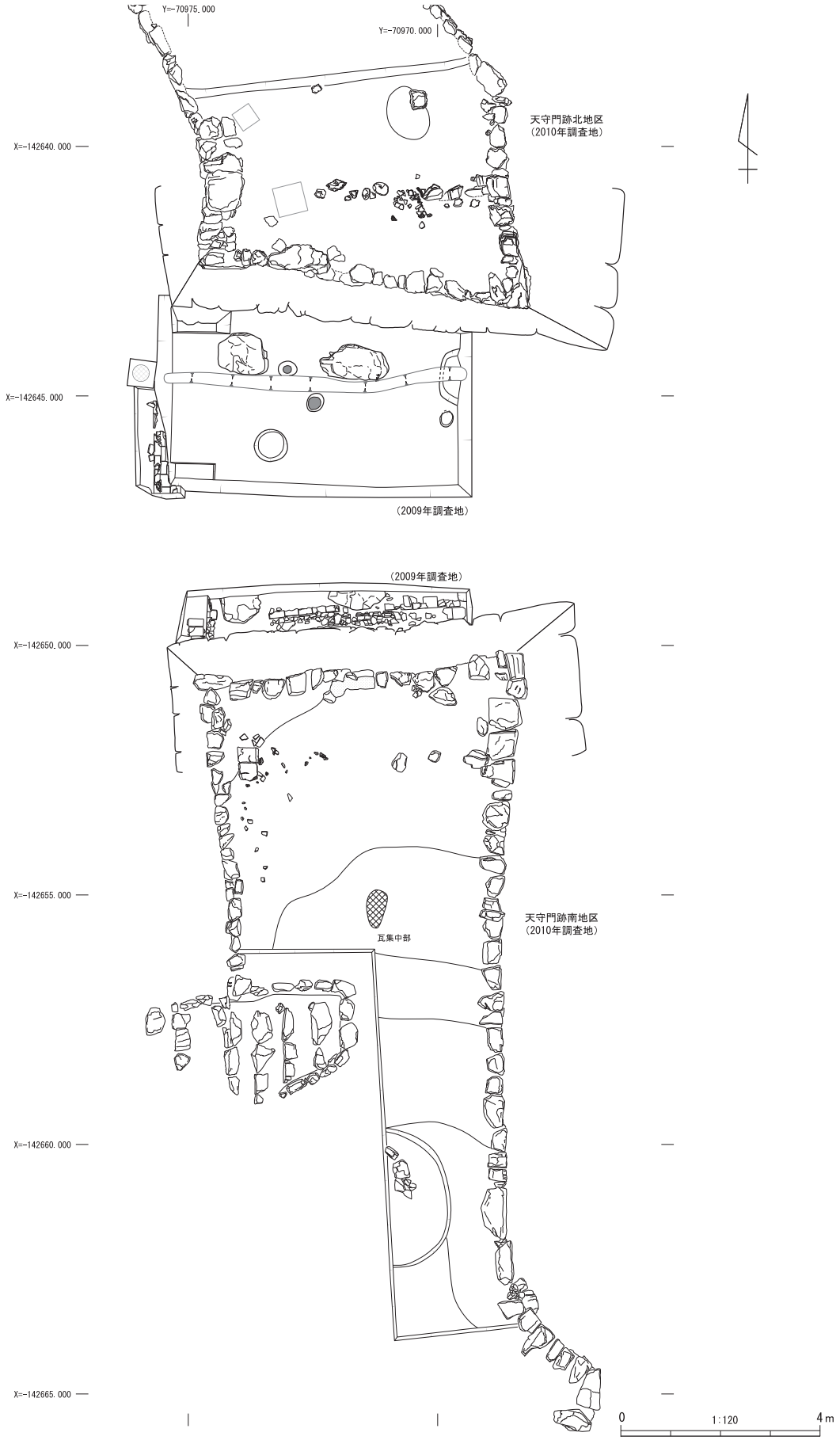


Fig.5　天守門跡全体図

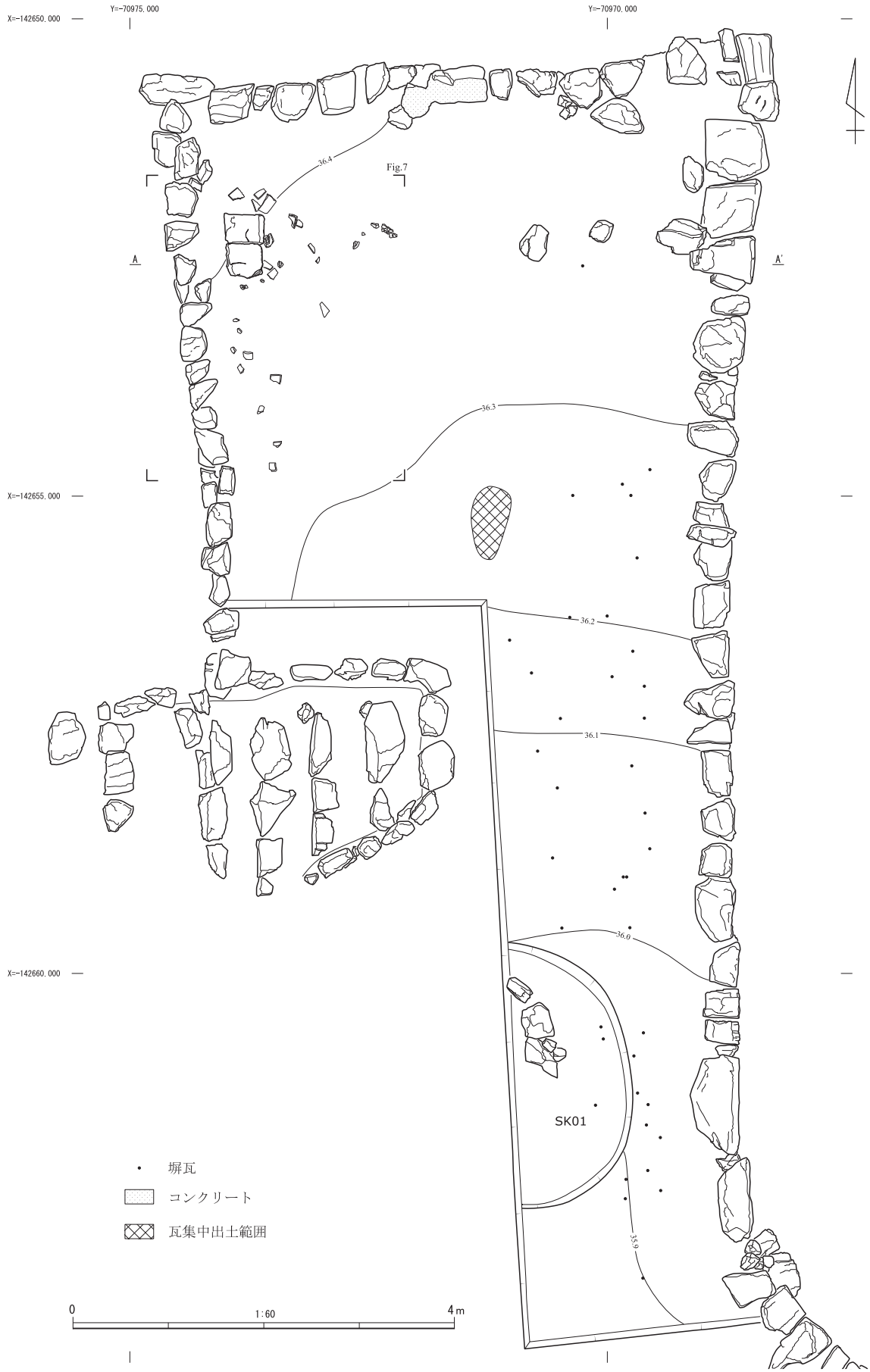


Fig.6　天守門跡南地区検出遺構

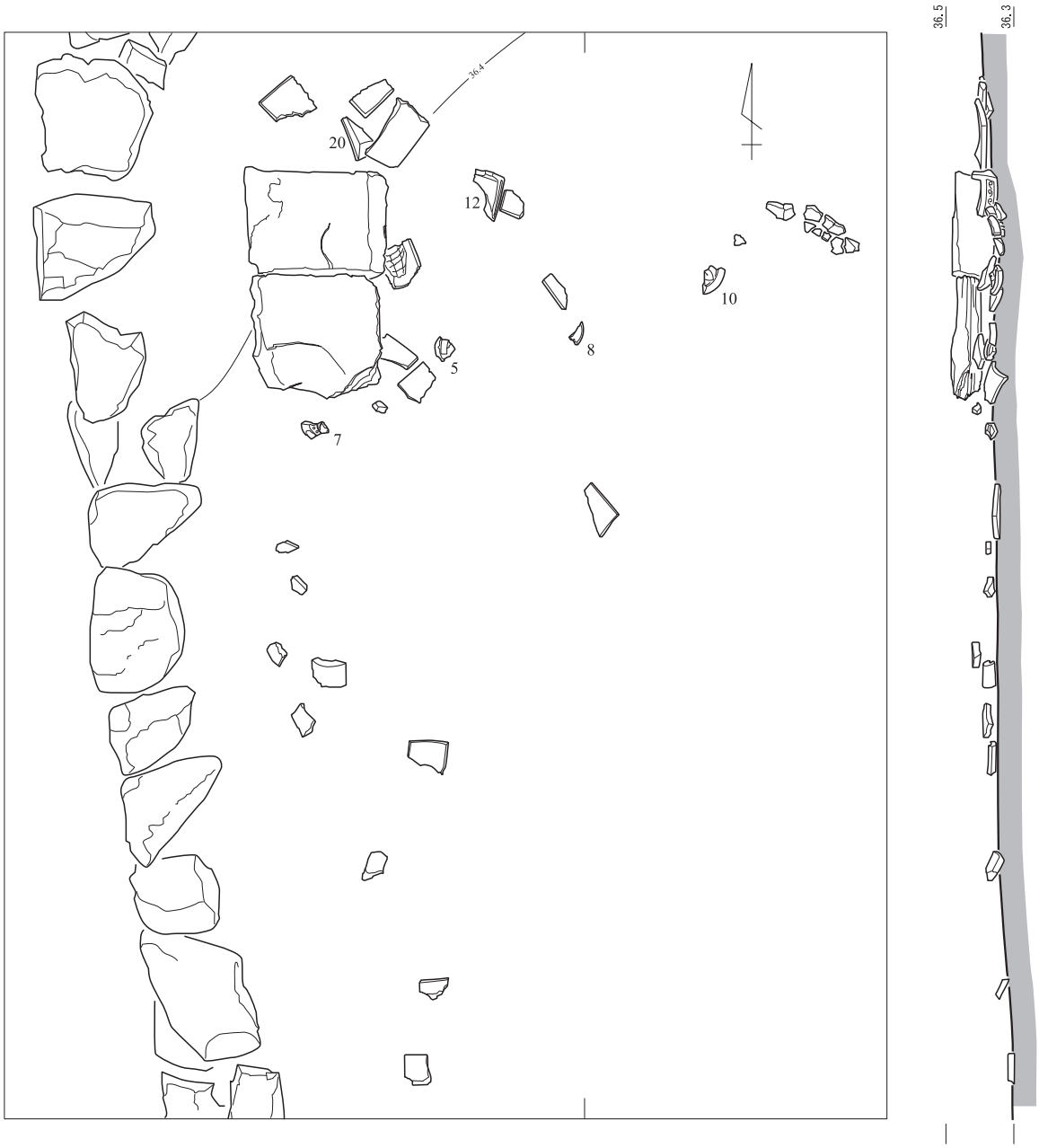


Fig.6　A-A´断面

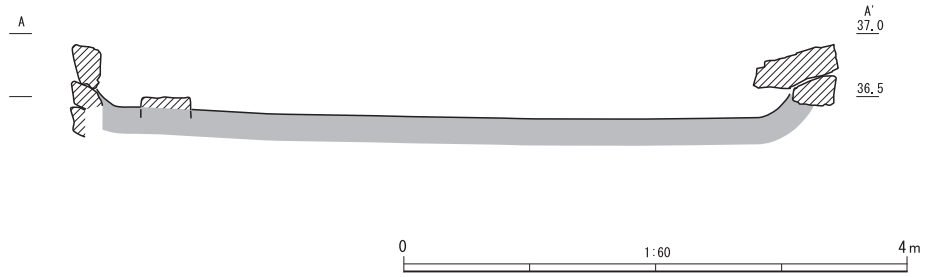


Fig.7　天守門跡南地区遺物出土状況

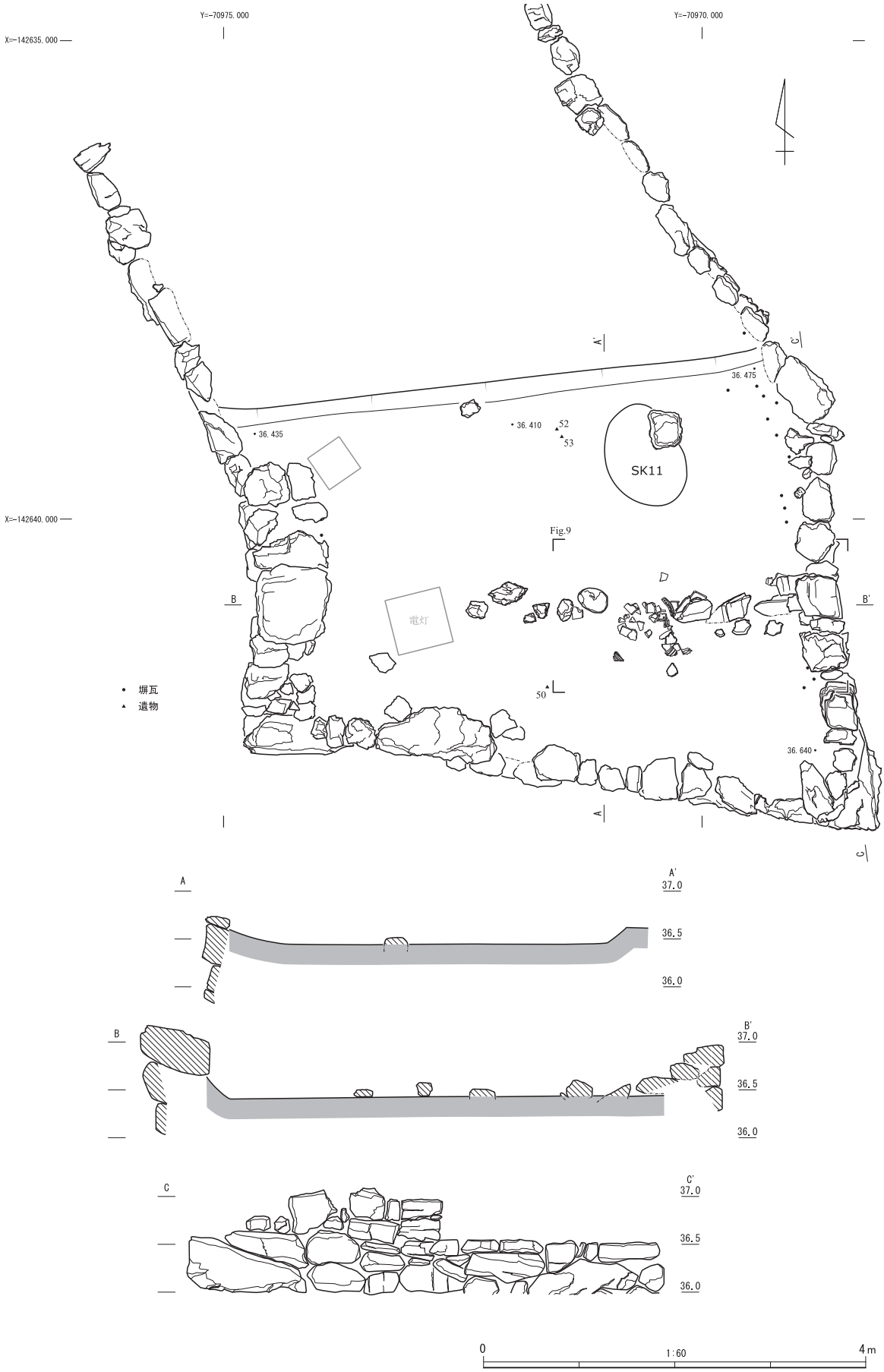


Fig.8　天守門跡北地区検出遺構

天守門の規模　南北の調査区で櫓の基礎構造と考えられる根石列が確認できた。根石列間の距離（櫓の南北幅：桁行）は、約11.5mである。この数値は６尺（1.82m）を基準としたときの６間分（10.92m）に相当する。櫓の東西幅（梁間）は不明確であるが、一階部分の東西幅よりも大きいことが確実である。

櫓の基底高　今回の調査で検出した根石列は乱れている部分が大きいが、櫓の基礎構造と捉えられる。ただし基礎部分は相当崩れており、櫓が構築された基底面を残している部分はない。櫓の基底面は根石や発掘調査における検出面（標高36.4m付近）より高い位置にあったことは確実であるが、その正確な高さをうかがうことは難しい。こうした中で、天守門跡北地区東側の石垣（Fig.8、C－C´立面）が比較的良好な遺存状態を示している点は注目できる。最上段の石垣は既に移動されているものが多いが、当該部分の石垣は往時の姿を留めている可能性がある。この想定が妥当であるとすれば、根石列の延長上にある東端の石材（Fig.9に網カケで示す）の上面（標高37.0m付近）を櫓の基底高とみなすことが許されよう。

土　塀　南北の調査区とも、石垣上の土塀にかかわる直接的な遺構は確認できなかった。ただし、天守門の南北両脇からは塀瓦が数多く出土したことから、瓦葺きの土塀があったことがうかがえる。塀瓦が集中的に出土する部分では、丸瓦や平瓦が出土することが極めて稀であった。塀瓦の出土位置は南地区、北地区ともに櫓門の想定位置の外側に集中しており、塀瓦の分布状況においても先に想定した天守門の規模の妥当性を示すことができた。

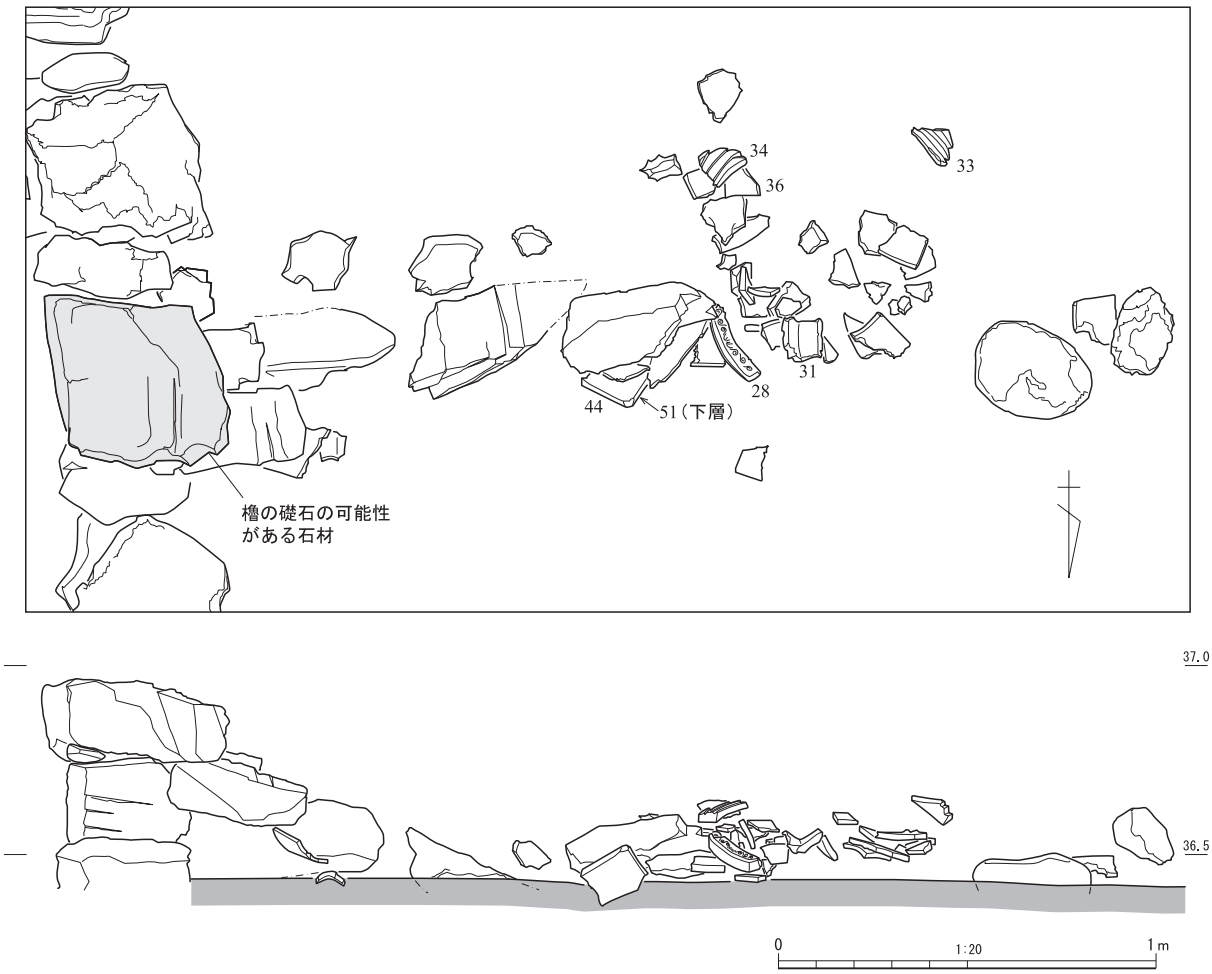


Fig.9　天守門跡北地区遺物出土状況

2　天守門跡出土遺物

天守門跡南地区出土遺物　（Fig.10・11）　天守門跡南地区からは、大量の瓦が出土した。このうち、軒丸瓦（１～10）、軒平瓦（11～18）、丸瓦（19～22）、塀瓦（23・24）を図示する。

軒丸瓦のうち、１～８が三ツ巴紋、９・10が桔梗紋である。三ツ巴紋はいずれも瓦当面や丸瓦凹面の遺存状態が悪く、帰属時期を明確にすることが困難なものが多い。このうち１は丸瓦凹面に斜め方向のコビキ痕（コビキＡ、森田1984）がみられるもので、堀尾氏在城期（1590～1600年）に遡るとみられる。また、４は巴の先端が長く、同時期に属すると考えられる。いっぽう、６は丸瓦凹面に強い横方向のコビキ痕（コビキＢ、森田1984）がみられ、17世紀以降に降るものと捉えられる。これ以外の三ツ巴紋軒丸瓦は、珠紋に大小がみられること（２・７）をはじめ、三ツ巴の大きさが縮小化していること（７）、離れ砂を使用すること（５）、色調が黒色で焼成が不良なこと（２・３・７）といった要素がみられる。いずれも17世紀以降に降る特徴とみて矛盾はない。９・10の桔梗紋を用いる軒丸瓦は、太田氏在城期（1644～1678年）の所産とみられる。

天守門跡南地区からは軒平瓦が比較的豊富に出土した。いずれも三葉もしくは五葉の中心飾りの両側に均整唐草紋があしらわれている。11～13は片側に３単位の渦紋が並ぶもので、浜松城跡の過去の出土品に類例がある（浜松市教委1996、図16-48、写真33）。14は中心飾りが五葉であり、長めの２単位の渦紋が連続するもので、同様に類例（浜松市教委1996、図16-50、写真31）が報告されている。17・18は渦紋が二重にされるもので、同じく類例（浜松市教委1996、図16-45・47、写真34・32）がある。

丸瓦は19～21を図示する。凹面にコビキＡ技法がみられ（19）、横方向の縫い取り目も観察できる（19～21）。技法的な特徴から、16世紀末に遡るとみられる。22は弧状に成形された道具瓦、23・24は塀瓦（目板瓦）である。

天守門跡北地区出土遺物　（Fig.12～14）　天守門跡北地区から出土した遺物のうち､軒丸瓦（25・26）、軒平瓦（27～32）、鯱瓦（33･34）、鬼瓦（35）、丸瓦（36～43）、塀瓦（44～49）、鉄釉皿（50）、鉄釘（51）、銭貨（52・53）を図示する。

軒丸瓦には三ツ巴紋のほかに、26の九目結紋がみられる。本庄（松平）氏在城期（1702～1729年、1749～1758年）の製作と捉えられる。軒平瓦は南地区で出土したものと同型式以外のものとして、27と30が知られる。27は模様の特徴から、16世紀末に遡るとみられる。

33・34は鯱瓦である。色調や整形技法に違いがみられることから、別個体とみられる。35は桐の家紋をあしらった鬼瓦とみられる。浜松城が16世紀末には豊臣系の城郭であったことを示す遺物といえるだろう。

丸瓦のうち、36～40には、凹面にコビキA技法および、横方向の縫い取り目がみられる。36には吊り紐痕もみられ、16世紀末の所産とみて矛盾はない。なお、36の端面は明瞭な玉縁をなしておらず、特殊な形態である。41は横方向の縫い取り目と内タタキ技法が見られる個体である。42は凹面に縫い取り目が縦方向にみられるもので、凸面には格子目タタキ痕をもつ。41・42ともに浜松城跡出土品では類例が少ない。43はコビキＢ技法に粗い布目、内タタキがみられる個体である。17世紀後半以降のものと捉えられる。

44～49は塀瓦、50は鉄釉皿、51は鉄釘である。52は洪武通宝（初鋳1368年）、53は銭貨名が判読できないが、北宋銭の可能性が高い。

Fig.10　天守門跡南地区出土遺物（1）

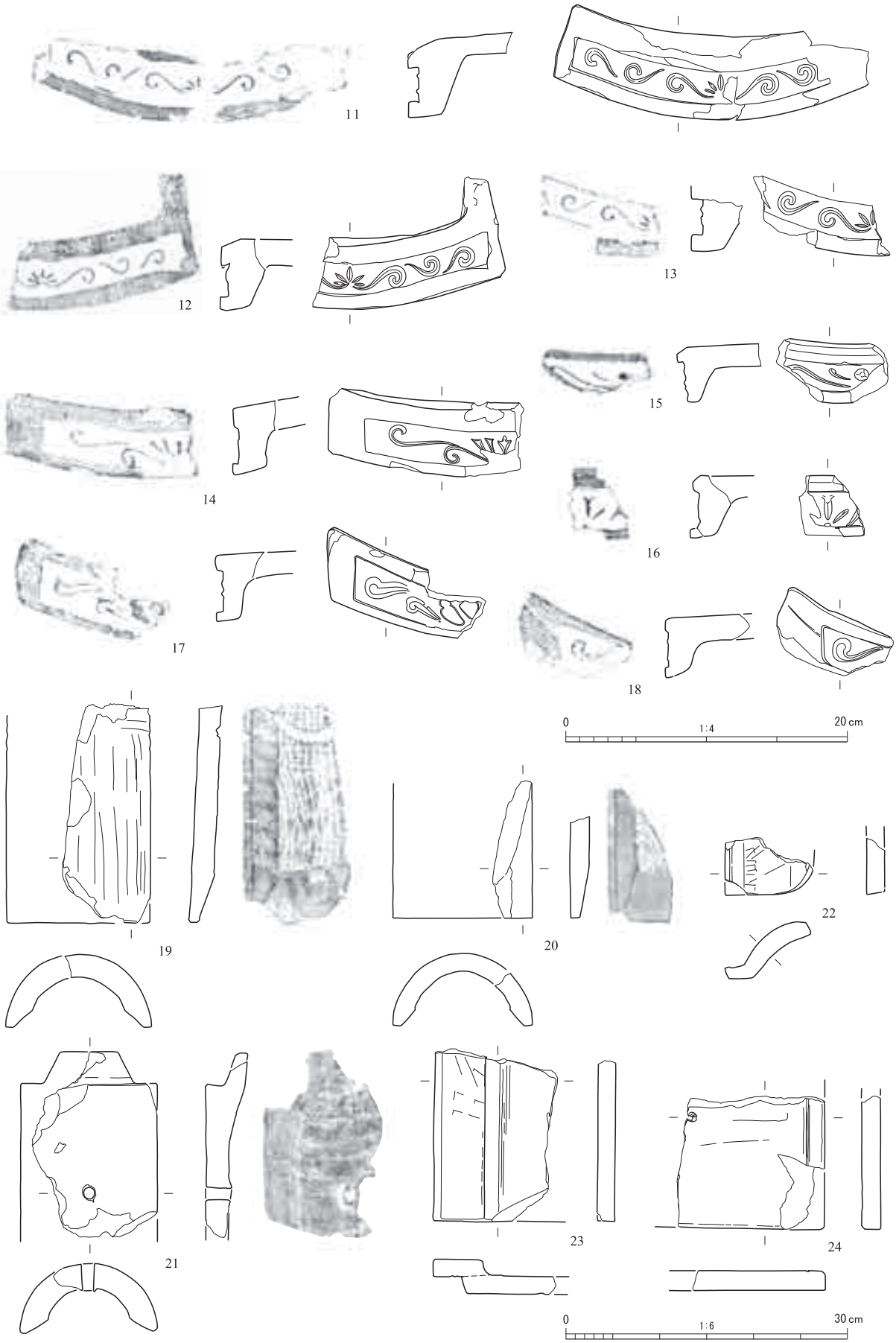


Fig.11　天守門跡南地区出土遺物（2）

Fig.12　天守門跡北地区出土遺物（1）

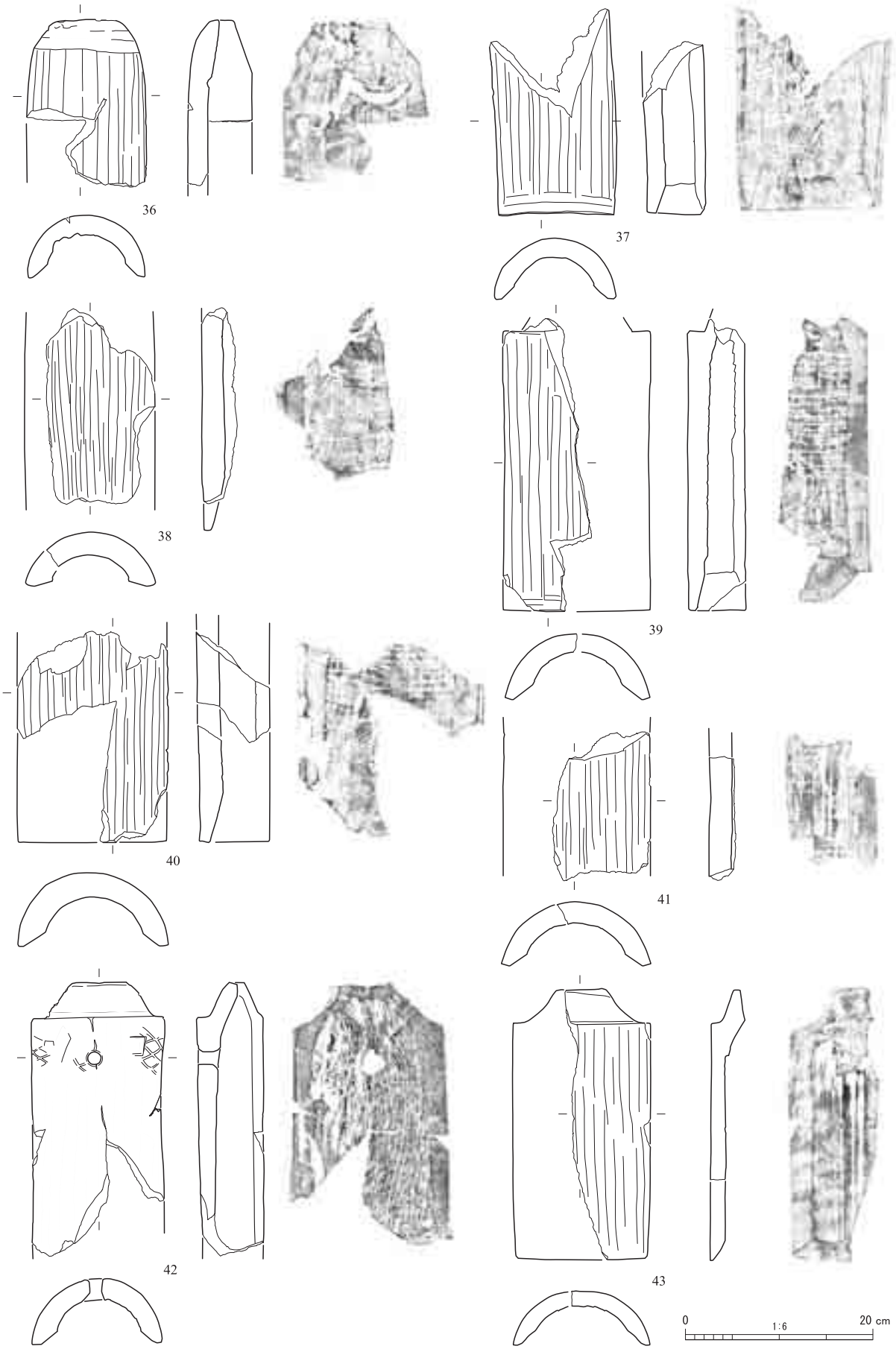


Fig.13　天守門跡北地区出土遺物（2）

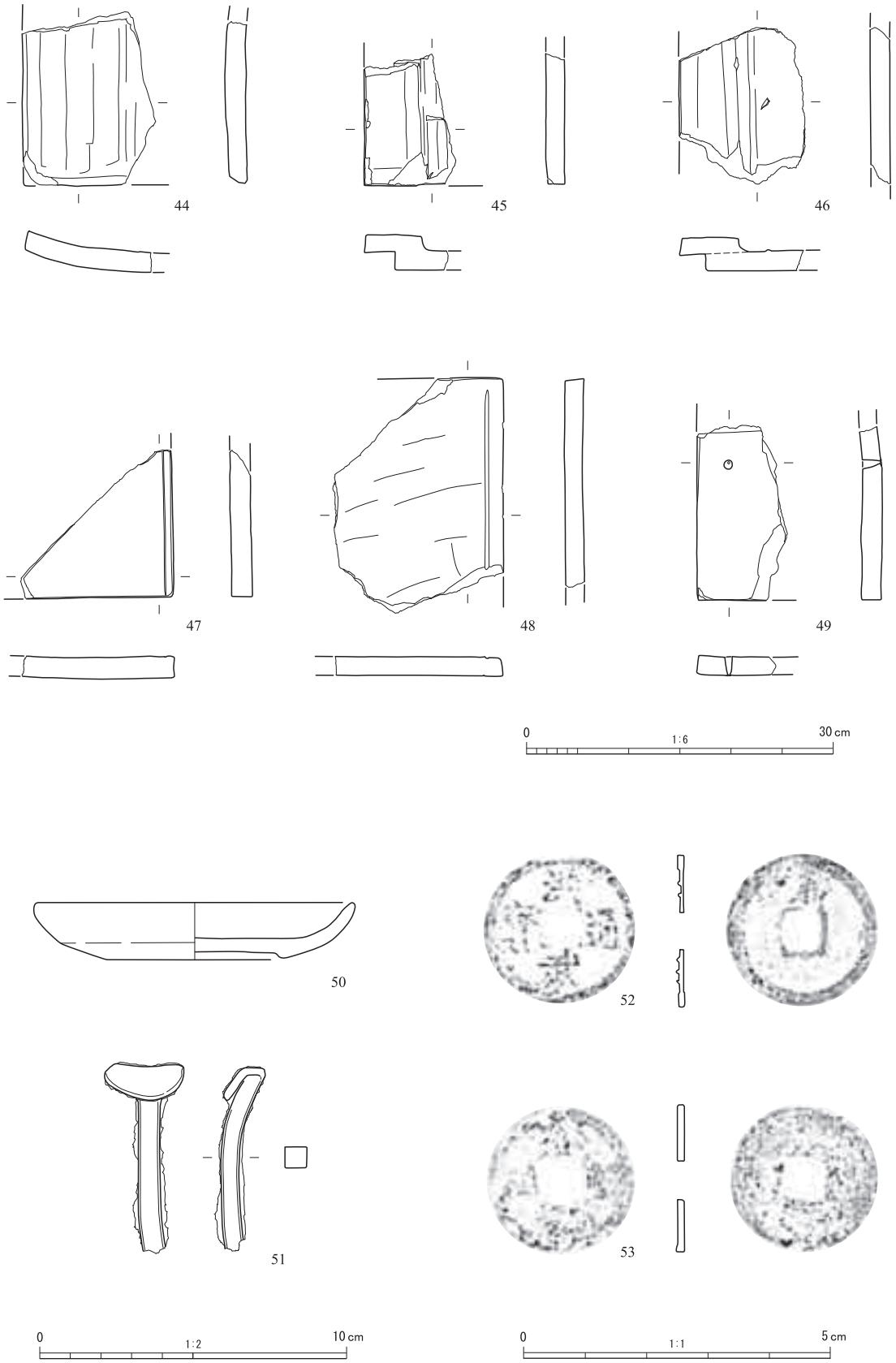


Fig.14　天守門跡北地区出土遺物（3）

第３章　富士見櫓跡の調査

１　検出遺構

概　要（Fig.15）富士見櫓跡は、2009年の４次調査において、北東側に３石分の礎石が検出され、礎石列と石垣上端部の間には玉砂利が敷かれている状況が確認できた。今回は前回の調査で未発掘であった北西部と南西部を対象として、補足的な調査を行った。北西部では、埋没していた石垣列を検出し、石垣が折れ曲がる状況を確認した。南西部では、北部で確認できたものと同様の玉砂利が敷かれている状況を確認した。

北西部　北西部では、石垣が屈曲する状況を確認した。屈曲部は直角ではなく、鈍角を呈している。石垣の屈曲部の幅は、上端で約１ｍである。屈曲部分の確認により、北部の玉砂利が敷かれている範囲も確定した。屈曲部の隅角上端の石垣は崩落していたが、下部の石垣は比較的良好に遺存していた。隅部には算木積はみられない。新たに調査した部分では、建物の礎石などは検出できなかった。出土遺物も塀瓦が集中的に出土する以外は目立ったものはない。

石垣屈曲部では、北側の石垣が埋め戻されている状況を確認した。西側の石垣を先行して構築し、一部石垣を埋めながら北側に屈曲部を形成したとみられよう。石垣屈曲部は崩落土により埋没していたが、今回の調査で崩落土を60㎝ほど精査した。崩落土中には遺物が豊富に含まれ、鯱瓦（68・69）、環状金具（70）などをはじめとする多くの遺物が出土した。

南西部　南西部では明確な遺構は検出できていない。ただし、調査区の南西端において北側と同様の玉砂利を検出した。玉砂利の集中度は高く、遺存状態は良好であった。富士見櫓の北側から西側にかけて広い範囲で玉砂利が敷かれていた可能性が考えられる。

２　富士見櫓跡出土遺物

富士見櫓跡からは、Fig.16・17に示す遺物が出土した。すべて石垣屈曲部上部もしくは、崩落土中からの出土品である。54～56が軒丸瓦、57が軒平瓦、58が不明瓦、59・60が丸瓦、61が平瓦、62が雁振瓦、63～67が塀瓦、68・69が鯱瓦、70が環状金具、71が鉄釘である。

軒丸瓦（54～56）はいずれも三ツ巴紋であり、形態的特長から17世紀以降に降るものばかりである。軒平瓦（57）も同様に新しい時期の傾向を示している。58は、方形の突起が作り出された瓦で、種類は不明である。

丸瓦（59・60）は２点共に、コビキＢ技法に粗い布目が見られる。製作技法の特徴から、17世紀以降の所産といえる。62の雁振瓦にはコビキＡ技法がみられる。ただし、この個体は通常の丸瓦ではないので、この特徴をもって16世紀のものと断定してよいか、慎重に判断すべきであろう。

塀瓦（63～67）は遺存部分の大きいものが目立つ。石垣北側に沿って土塀がめぐっていたことを示すものといえよう。65は桟部分と端部が斜交する。屈曲部に用いられたものとみられる。

鯱瓦は鰭部（68）と体部（69）の２点が出土した。両者は焼成、色調が異なるので、別個体の可能性が高い。鰭部（68）の破片は、天守門跡出土品（33・34）と比べると薄く、平面的である。体部（69）の鱗は線刻で表現されている。70は鉄製の環状金具、71は鉄釘である。

Fig.15　富士見櫓跡検出遺構

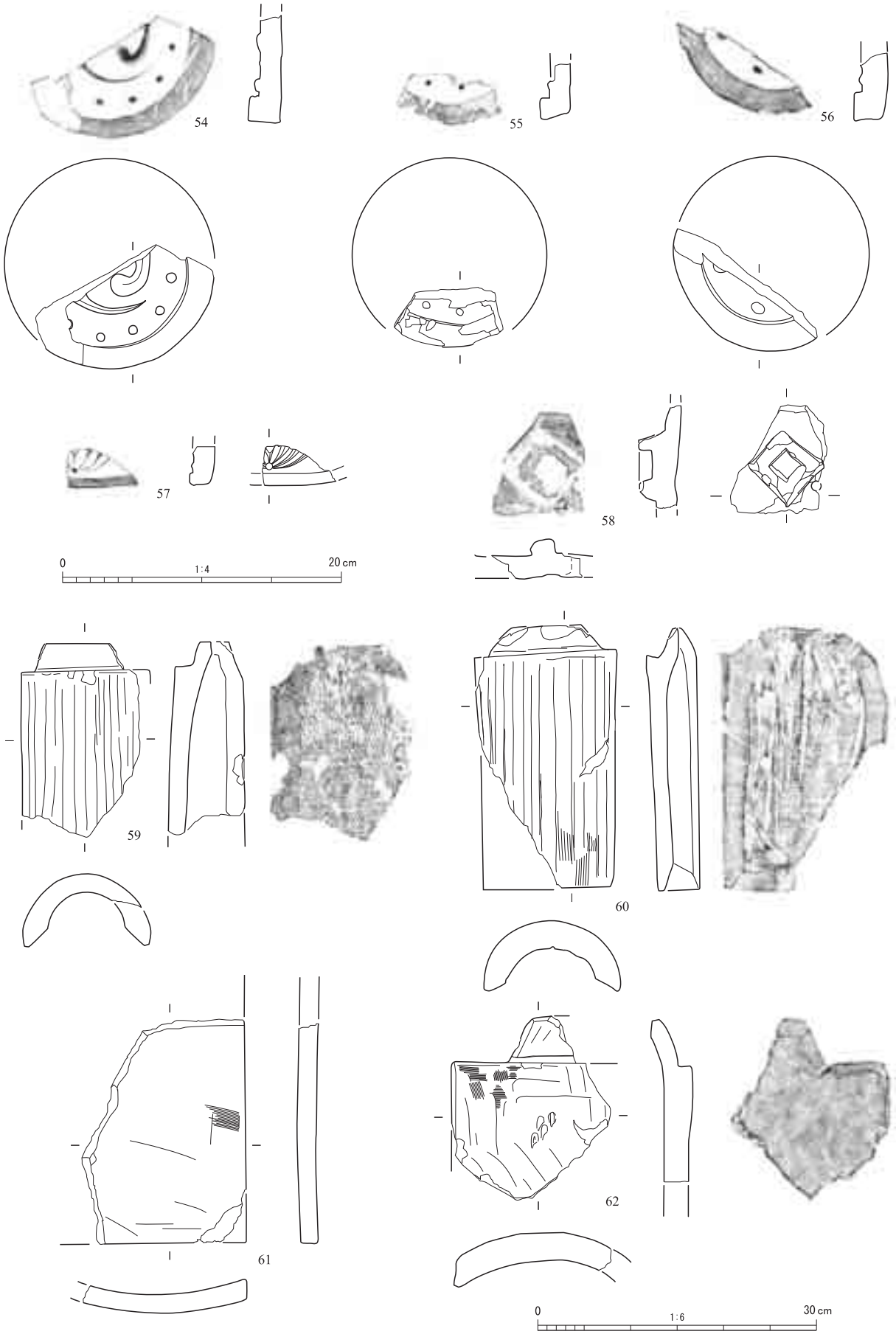


Fig.16　富士見櫓跡出土遺物（1）

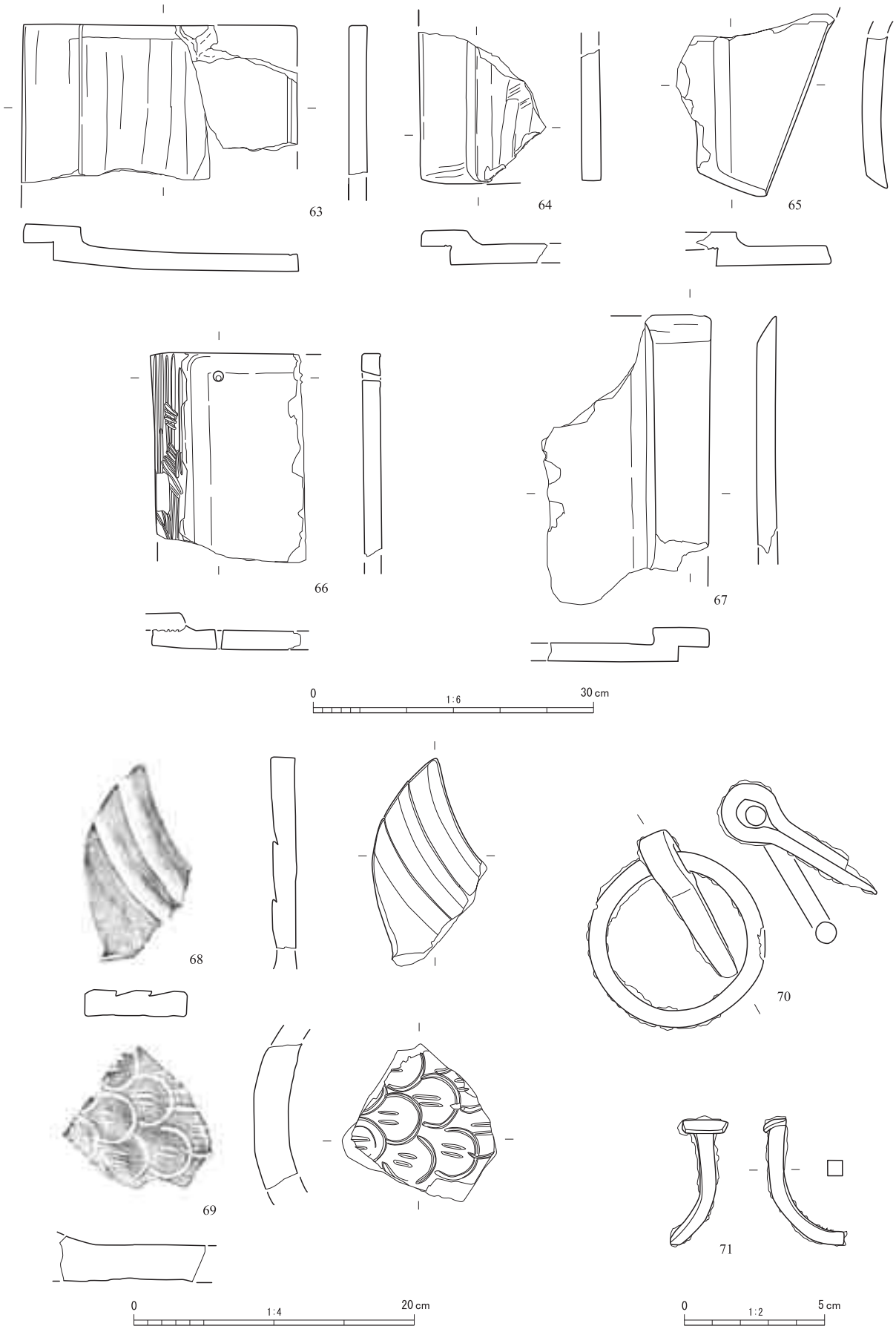


Fig.17　富士見櫓跡出土遺物（2）

第4章　総　括

1　天守門について

天守門の規模　今回の調査によって、天守門が二階建ての櫓門であることが確定できた。また、櫓の基礎構造とみられる根石列を検出し、南北の境界がほぼ確定できた。

南北の調査区で確認した根石列間の距離（櫓の南北幅：桁行）は、約11.5mである。この数値に見合う櫓の規模としては、6尺（1.82m）を基準としたときの6間分（10.92m）が相当するだろう。この想定は、安政元年（1854）の地震による浜松城の被害を記した『安政元年浜松城絵図』で記された天守門の規模「桁六間」とも整合的である。

櫓の基底高　櫓の基底高については、必ずしも明確にできなかった。櫓の基礎部分は相当崩れており、その基底部を残している部分はない。ただし、天守門跡北地区東側の石垣は良好な遺存状態を示しており、この部分の特徴から、標高37.0m付近が櫓の基底高である可能性が指摘できる。

土　塀　南北の調査区とも、控柱の柱穴列といった土塀にかかわる直接的な遺構は確認できなかった。しかし、天守門の南北両脇からは塀瓦が数多く出土したことから、瓦葺きの土塀があったことは明確である。塀瓦の出土位置は南地区、北地区ともに櫓門の想定位置の外側に集中しており、塀瓦の分布状況においても先に想定した天守門の規模の妥当性を示すことができる。

天守門の時期　天守門跡から出土した瓦は、堀尾氏在城期（1590〜1600年）に遡るものが含まれる。天守門は天守と同時期、16世紀末に創建されたものとみてよいだろう。今回の出土品の中に、豊臣家の家紋である桐をあしらった鬼瓦とみられる個体（35）が含まれる点は注目できる。浜松城が16世紀末において豊臣系の城郭であったことを雄弁に物語る遺物といえよう。

浜松城の天守は江戸時代の初期には既になく、江戸時代を通じて再建されることは無かった。いっぽう、天守門跡の出土遺物には、太田氏在城期（1644〜1678年）の所産とみられる桔梗紋軒丸瓦や、本庄（松平）氏在城期（1702〜1729年、1749〜1758年）の製作と捉えられる九目結紋軒丸瓦が含まれる。天守門は16世紀末の創建の後、17〜18世紀においても改修が続けられていたことが出土品から確認できる。

2　富士見櫓について

富士見櫓と石垣　今回の調査によって、北側の石垣は直線的でなく鍵の手に折れ曲がる形状であることが判明した。この石垣上端の平面形は、検出した富士見櫓の礎石列と不整合であることから、石垣構築時と、4次調査で検出した建物の構築時期は異なる可能性が考えられる。また、北側の石垣外側の崩落土や石垣上端付近からは塀瓦が集中的に出土した。富士見櫓の北側には塀瓦を用いた土塀が巡っていたことが確実になった。

富士見櫓の規模　富士見櫓の中心部は後世の攪乱、破壊が著しく、発掘調査の結果から旧態を想定するには困難を伴う。今回の調査では、富士見櫓の規模にかかわる新たな情報は得られなかったが、北側における玉砂利の範囲が確定し、新たに南西側においても玉砂利の存在を確認した。

富士見櫓の時期　後述する出土遺物の比較でも明らかなように、4次・5次調査を通じて、富士

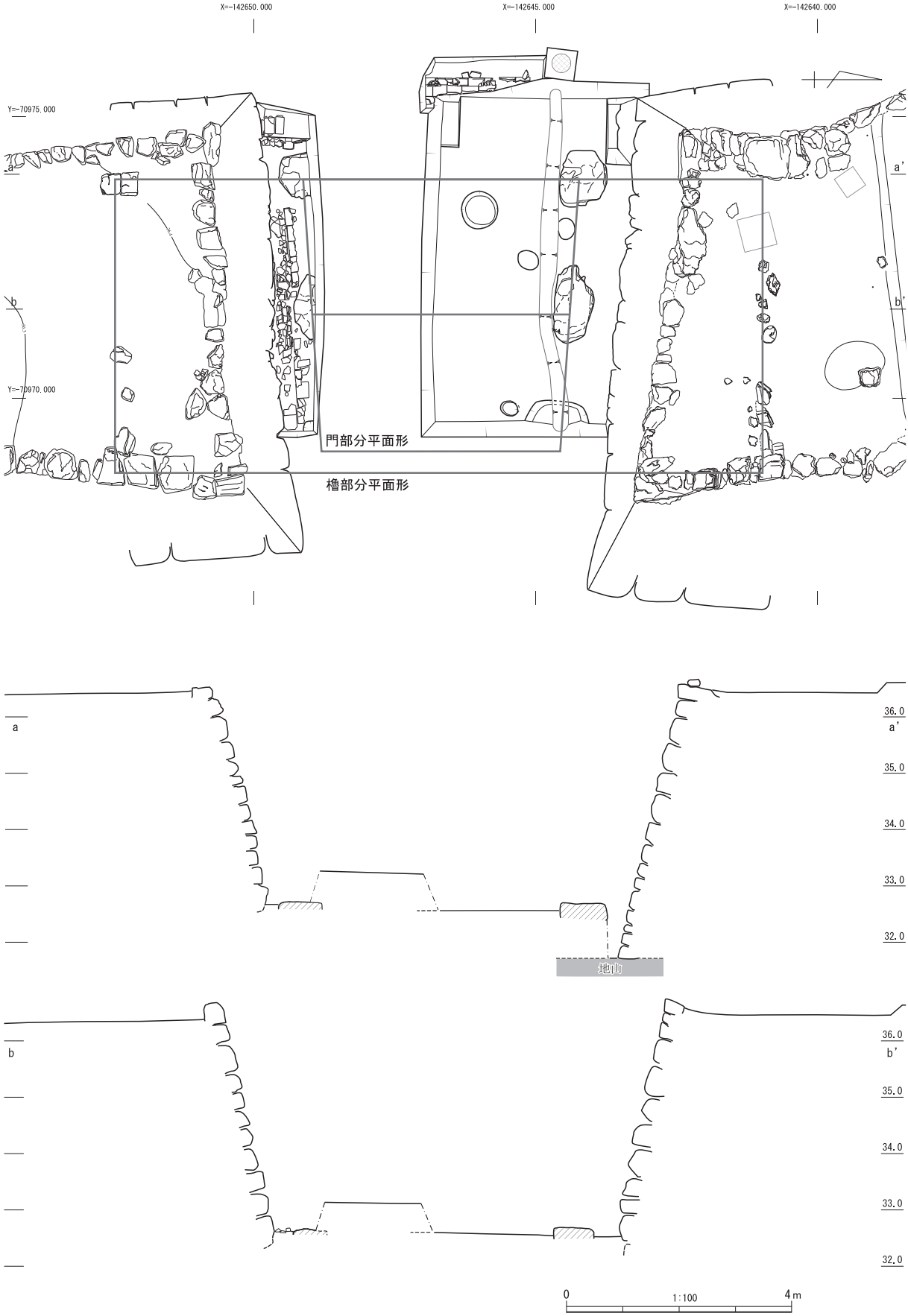


Fig.18　天守門復元図

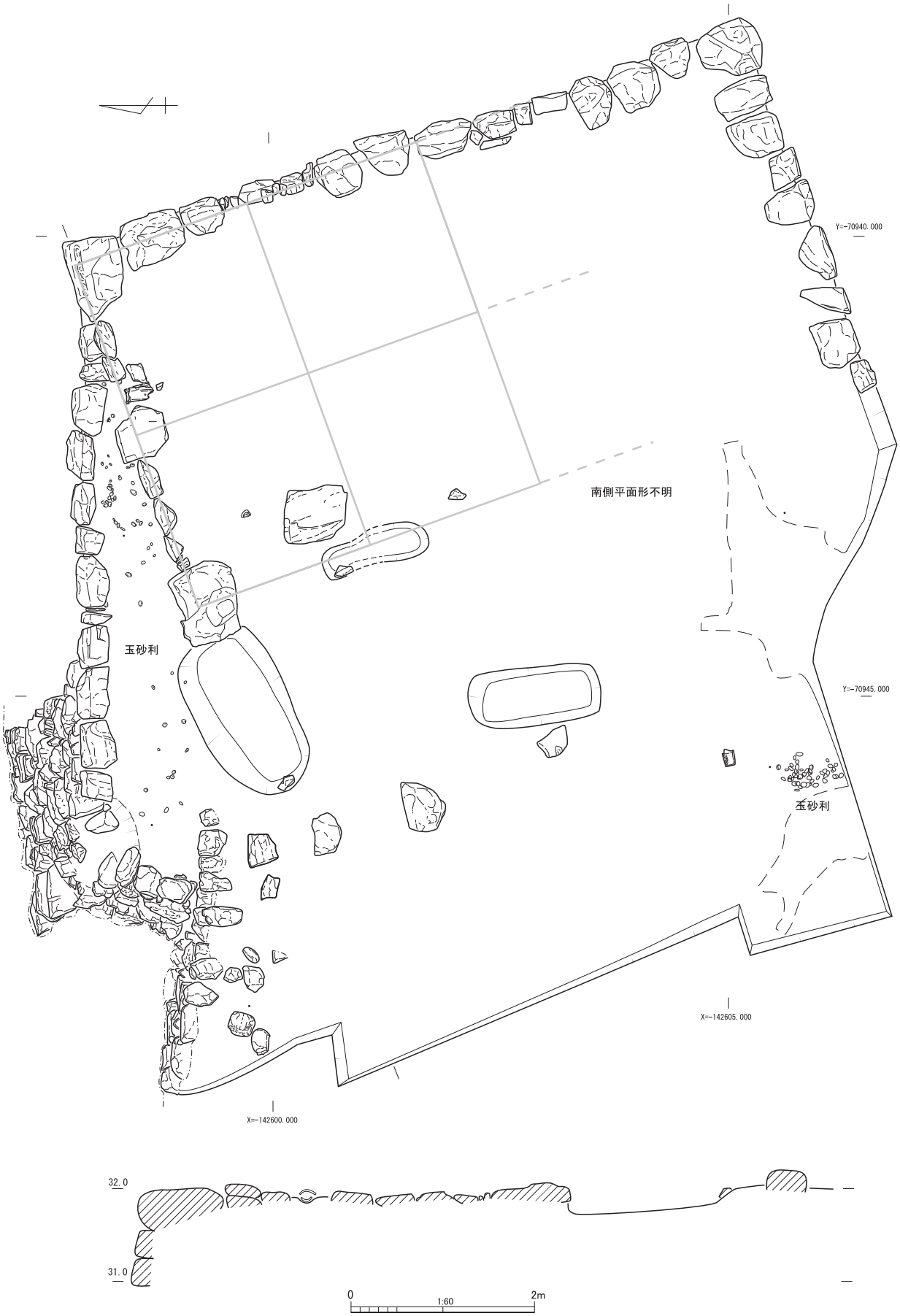


Fig.19　富士見櫓復元図

見櫓跡から出土した遺物は、天守門跡の出土品と比べ相対的に新しい時期のものが多い。明確に16世紀末（後述するⅠ期）に遡る遺物がみられない点は、天守門跡出土品の様相とは大きく異なる。出土遺物からうかがえる富士見櫓の建築時期は、４次調査の見解どおり17世紀中葉頃（Ⅲ期）とみてよいだろう。なお、今回検出した遺構の下層に創建期の遺構、遺物が埋没している可能性もある。

３　出土遺物の特徴

出土瓦の変遷　近世の浜松城は目まぐるしく城主が交代し、数多くの家紋瓦が知られている。城主との対応から、家紋瓦の製作時期が特定できる好条件に恵まれている。浜松城跡における瓦の変遷は、４次調査の報告で触れたように、家紋瓦に伴う特徴を整理し、その他の丸瓦にみられる痕跡との関係で捉えることができる（浜文振2010、p22）。その内容は今回の調査で出土した資料を加えても整合的に理解できる（Tab.1）。大まかな群別と時期について、以下に示しておこう。

Ⅰ期　16世紀末　　［凸面］縄目タタキ痕、［凹面］コビキＡ、細布痕、横目縫取痕、吊紐痕

Ⅱ期　17世紀前半　［凹面］コビキＢ、細布痕

Ⅲ期　17世紀後半～18世紀後半　［凹面］コビキＢ、粗布（編物）痕、内タタキ痕

Ⅰ期は、丸瓦凹面にコビキＡがみられる時期にあたる。コビキＡと高頻度で伴う丸瓦の特徴として、凸面における縄目タタキ痕、凹面における単位が細かい布目（10単位以上／１㎝）圧痕、横目方向の縫い取り痕跡、吊り紐（太い撚り紐）痕跡などがあげられる。この時期に位置づけられる軒丸瓦は三ツ巴紋で、［浜松市教委1996、図13-34・35］が典型例としてあげられる。同時期の軒平瓦は均整唐草紋を用いたもので、［浜松市教委1996、図16-41］が該当する。

遠江の城郭に瓦葺きの建物が採用されたのは、徳川家康が1590年に関東に移った後、豊臣系列の大名が配置されてからのことと考えられている（加藤1993a）。Ⅰ期の瓦は、浜松城に豊臣系列大名である堀尾吉晴が入城した際に用いられたものと捉えられ、実年代として16世紀末（1590～1600年）をあてはめることができるだろう。浜松城跡から出土する瓦の中では、Ⅰ期に位置づけられるものが比較的多い。これは、現地に残されている本丸や天守曲輪がⅠ期に整備されたことを示している。なお、二の丸や三の丸の様相は、出土品が知られず不明である。

Ⅱ期は、丸瓦の凹面にみられるコビキ痕がコビキＡからコビキＢへ転換した後の初期にあたる。具体的には、凹面にコビキＢがみられ、単位が細かい布目圧痕を残す古相の一群がⅡ期の丸瓦とみられる。

静岡県内におけるコビキＢの出現は、加藤理文の指摘によると正保年間（1644～48年）以降とされている（加藤1994）。この見解では、Ⅰ期の存続時期を16世紀のうちに収めると捉えると、17世紀前半に帰属する瓦の様相が不明確になるといった問題がある。いっぽう、山崎信二は全国的な近世瓦の検討を通じて、静岡におけるコビキＢの出現は1600年前後まで遡るとみる見解を示している（山崎2008）。ここでは山崎の理解を支持し、当地におけるコビキＡからコビキＢへの転換を1600年前後と想定したい。

Ⅱ期に位置づけられる軒丸瓦は、すべて三ツ巴紋で、家紋をあしらったものは知られていない。浜松城における家紋瓦の出現時期を太田資宗の入城（1644年）以後と捉えれば（加藤1993b）、矛盾はない。以上のことがらを総合すると、Ⅱ期は、堀尾氏移封（1600年）以後、浜松城で家紋瓦が出現する（1644年）以前の17世紀前半に相当すると捉えられる。

Ⅲ期は、丸瓦凹面に単位が粗い（６～７単位以下／１㎝）布もしくは編物の圧痕や内タタキ痕

Tab.1　浜松城跡出土丸瓦における諸属性

資料名	出土位置	凸面	凹面								群別
		タタキ痕	コビキ		布(編)目		内面圧痕		内面調整		
		あり	コビキA	コビキB	細目	粗目	吊り紐	横縫取	内タタキ	指ナデ	
三ツ巴紋軒丸瓦　堀尾氏在城期以降（1590～）											
1996　図13-34	不　明	○			○			○			Ⅰ
1996　図13-35	不　明	○	○		○		○	○			Ⅰ
1996　図14-36	天守曲輪石垣下外周	○	○		○			○			Ⅰ
1996　図14-38	不　明		○				○				Ⅰ
4次　Fig.9-1	天守門跡(1階、北地区)							○			Ⅰ
5次　Fig.10-1	天守門跡(2階、南地区)		○								Ⅰ
4次　Fig.9-6	天守門跡(1階、北地区)			●	○						Ⅱ
5次　Fig.10-6	天守門跡(2階、南地区)			●							Ⅱ
浜博所蔵	不　明			●	○						Ⅱ
桔梗紋軒丸瓦　太田氏在城期（1644～1678）											
浜博所蔵(天守閣)	不　明					●					Ⅲ
無字銭紋軒丸瓦　青山氏在城期（1678～1702）											
1996　図20-69	不　明					●	○		●		Ⅲ
九目結紋軒丸瓦　本庄(松平)氏在城期(1702～1729、1749～1758)											
浜博所蔵(常設展)	不　明			●							Ⅲ
浜博所蔵(常設展)	令松寺境内北側								●		Ⅲ
井桁紋軒丸瓦　井上氏在城期（1758～1817、1845～1868）											
1996　図20-70	不　明					●			●		Ⅲ
丸　瓦											
4次　Fig.10-12	天守門跡(1階、北地区)	○	○				○	○			Ⅰ
4次　Fig.10-13	天守門跡(1階、北地区)	○	○				○	○			Ⅰ
4次　Fig.10-14	天守門跡(1階、北地区)	○	○				○	○			Ⅰ
4次　Fig.10-15	天守門跡(1階、北地区)		○				○	○			Ⅰ
4次　Fig.10-16	天守門跡(1階、北地区)							○			Ⅰ
4次　Fig.10-17	天守門跡(1階、北地区)							○			Ⅰ
5次　Fig.11-19	天守門跡(2階、南地区)		○		○		○	○			Ⅰ
5次　Fig.11-20	天守門跡(2階、南地区)		○		○						Ⅰ
5次　Fig.11-21	天守門跡(2階、南地区)		(○)		○			○			Ⅰ
5次　Fig.13-36	天守門跡(2階、北地区)	○	○		○		○	○			Ⅰ
5次　Fig.13-37	天守門跡(2階、北地区)		○		○			○			Ⅰ
5次　Fig.13-38	天守門跡(2階、北地区)		○		○			○			Ⅰ
5次　Fig.13-39	天守門跡(2階、北地区)		○		○			○			Ⅰ
5次　Fig.13-40	天守門跡(2階、北地区)		○		○			○			Ⅰ
5次　Fig.13-42	天守門跡(2階、北地区)	○			○			(○)			Ⅰ
5次　Fig.13-41	天守門跡(2階、北地区)				○			○	(●)		(Ⅰ)
4次　Fig.11-19	天守門跡(1階、北地区)			●							Ⅱ
4次　Fig.11-23	天守門跡(1階、北地区)			●	○						Ⅱ
4次　Fig.11-20	天守門跡(1階、北地区)			●		●					Ⅲ
4次　Fig.11-24	天守門跡(1階、北地区)					●					Ⅲ
4次　Fig.14-32	富士見櫓跡		(○)			●					Ⅲ
4次　Fig.14-33	富士見櫓跡					●					Ⅲ
5次　Fig.16-59	富士見櫓跡			●		●					Ⅲ
4次　Fig.11-21	天守門跡(1階、北地区)					●			●		Ⅲ
4次　Fig.11-22	天守門跡(1階、北地区)					●			●		Ⅲ
5次　Fig.13-43	天守門跡(2階、北地区)			●		●			●		Ⅲ
5次　Fig.16-60	富士見櫓跡			●		●			●		Ⅲ
4次　Fig.10-18	天守門跡(1階、北地区)									●	(Ⅳ)

凡　例

資料名「1996」：浜松市教育委員会1996『浜松城跡』掲載遺物
資料名「4次」：(財)浜松市文化振興財団2010『浜松城4次』掲載遺物
資料名「5次」：(財)浜松市文化振興財団2011『浜松城5次』(本書)掲載遺物
浜博所蔵：浜松市博物館所蔵品　　常設展：常設展示品　　天守閣：浜松城天守閣展示品
パーレン内の情報は不確実であることを示す
○：古相の属性、●：新相の属性
布(編)目痕の差異　細：10単位以上/1㎝　粗：6～7単位以下/1㎝
群別の時期　Ⅰ期：16世紀末　Ⅱ期：17世紀前半　Ⅲ期：17世紀後半～18世紀後半　Ⅳ期(仮)：18世紀後半以降

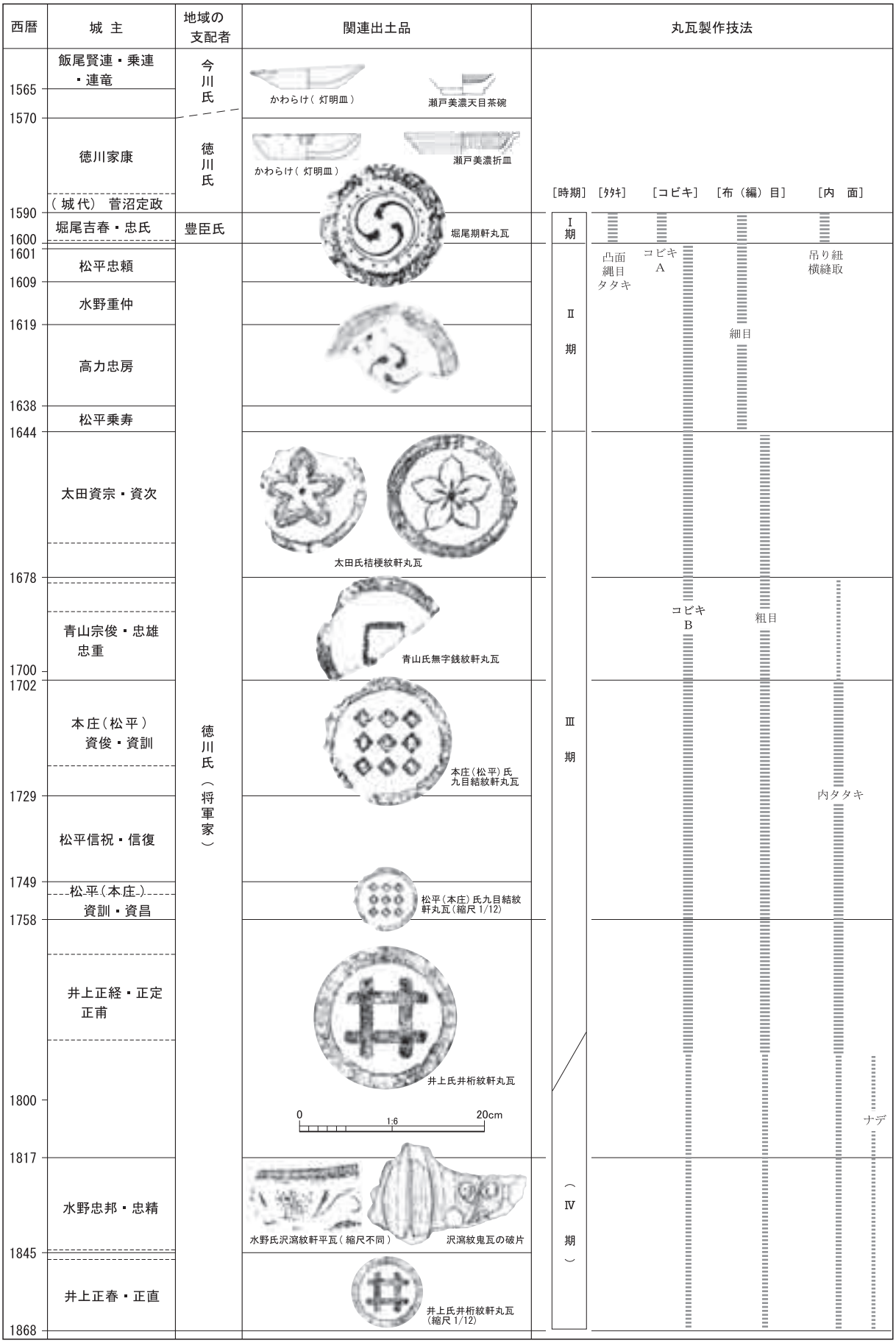


Fig.20　出土品の年代

（棒状工具による刺突痕）がみられる時期にあたる。丸瓦凹面にコビキ痕が観察できる場合は、すべてコビキＢである。現在までに知られている浜松城跡の家紋瓦はすべてこの段階のものであり、各大名の在城期から、Ⅲ期の実年代は17世紀後半から18世紀後半に相当することが知られる。なお、Ⅲ期の指標とした凹面粗布（編物）痕と内タタキ痕については、出現頻度に時期差がある可能性が高い。当地において、丸瓦凹面に内タタキ痕が高頻度でみられるのは18世紀頃以降のことと捉え、内タタキの多少を指標にⅢ期を二分してもよいだろう。

Ⅲ期以降の様相については資料が少ないため、詳細を明らかにすることができない。近隣地の寺院に用いられた瓦などを検討対象に取り上げ、総合的に検討を加える必要がある。試案として、凹面の調整に指ナデを用い、その他の痕跡をとどめない資料（４次調査、Fig.10-18）をⅣ期とし、該当時期を18世紀後半以降と仮定したが、比較資料が少なく、確定的な様相として捉えうるか検討の余地が大きい。

特徴的な遺物　天守門跡からは、家紋瓦を含む軒丸瓦、軒平瓦、鯱瓦などが出土した。出土した瓦は、創建期とみられるⅠ期に位置づけられるものが多い。家紋瓦として、桔梗紋、九目結紋が認められる点は、４次調査における出土品と共通する。富士見櫓跡においても多くの瓦が出土した。出土品の中では、遺存部分が大きい塀瓦（Fig.17-63〜67）の存在が目立つ。

鯱瓦は天守門跡から鰭部２点、富士見櫓跡から鰭部１点、胴部１点の合計４点が出土した。いずれも、焼成状態や色調、製作技法などの共通性がみられず、それぞれ別個体と判断できる。製作時期は明確にできないが、富士見櫓跡から出土した胴部破片（Fig.17-69）は鱗が線刻表現されており、帰属時期がうかがえる特徴をもつ。なお、天守門跡からは、以前にも鯱瓦の胴部が採集されている（浜松市教委1996、図18-58）。

天守門跡からは桐紋をあしらった鬼瓦（Fig.12-35）が出土した。桐紋瓦は、全国で60箇所程度の城郭からの出土が知られている（註１）。近隣では愛知県清須城や静岡県久野城、山梨県甲府城などに出土例がある。桐紋瓦の出土地は豊臣秀吉一族の城に加え、秀吉属将の城が多く含まれる。豊臣勢力の拡張を示すため、全国規模で桐紋瓦の採用が進められた結果とみられよう。浜松城も堀尾吉晴在城期に豊臣系列の城であったことを伝える遺物として注目できる。

４　結　語

2009年（４次調査）、2010年（５次調査）の２回にわたる発掘調査によって、天守門と富士見櫓にかかわる埋没遺構の様相はほぼ明らかになったといえる。

天守門は一階部分に６箇所の礎石を用いていること、瓦を用いた排水施設が伴うこと、二階部分の櫓の規模が幅11.5m程度であったことなどが判明した。とくに一階部分は埋没遺構が良好に遺存していること、改修に合わせ層位的な堆積が明瞭に観察できることなど、注目できる様相が数多い。また、出土遺物から、天守門の創建時期は16世紀末と考えられ、江戸時代を通じて維持されていたことが想定できるようになった。

富士見櫓については京間（１間：６尺５寸）を用いた３石の礎石を確認し、御殿風の建物であったこと、玉砂利が伴うこと、北側石垣が屈曲することなどが判明した。検出した遺構は一部にすぎず、建物の正確な平面形や規模は不明である。富士見櫓の創建時期は天守門より遅れ、17世紀中葉頃に降る可能性が指摘できるが、創建期の構造物が下層に埋没している可能性は残る。埋没遺構の情報が豊富な天守門跡と比べ、富士見櫓跡は後世の攪乱や破壊が著しく、かつてあった建物の具体

像に迫る情報は少ない。

天守門跡については、一階部分に比較的厚く埋没土がみられることから、天守曲輪内部にかけての構造解明が今後の課題として残る。また、天守曲輪を囲んでいた土塁についても、延長部分の継続的な探索が求められるだろう。富士見櫓跡についても北部石垣の外側に崩落土が厚く堆積しており、石垣基底部を明確にするためには更なる調査が必要である。いずれにせよ、浜松城跡の本格的な発掘調査は途についたばかりであり、今後の継続的な調査よって、より具体的かつ豊かな情報が得られるものと期待できる。

［註］

1　加藤理文氏からの教示。同氏からは出土地の一覧表、既出資料図面等の提供を受けた。

［参考文献］

太田好治　2009「浜松城」『静岡の山城ベスト50を歩く』サンライズ出版
加藤理文　1993a「東海地方における織豊系城郭の屋根瓦」『久野城跡Ⅳ』袋井市教育委員会
加藤理文　1993b「静岡県内における家紋瓦の成立」『静岡県考古学研究25』静岡県考古学会
加藤理文　1994「浜松城をめぐる諸問題」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論文集
浜松市教育委員会　1984『浜松城天守曲輪周辺の発掘調査について』
浜松市博物館　1995『特別展　浜松城のイメージ』
浜松市教育委員会　1996『浜松市指定文化財　浜松城跡―考古学調査の記録―』
（財）浜松市文化振興財団　2010『浜松城跡４次』
森田克行　1984「畿内における近世瓦の成立について」『摂津高槻城本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
山崎信二　2008『近世瓦の研究』奈良文化財研究所学報　第78冊　奈良文化財研究所

Tab.2　出土遺物観察表

Fig.	番号	取上番号	地　区	種別	細　別	残存(%)	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	色　調	備　　考
10	1	1	天守門南	瓦	軒丸瓦	20			2.2	暗灰	三ツ巴紋　コビキA
10	2	9	天守門南	瓦	軒丸瓦	10				暗灰	三ツ巴紋
10	3	11	天守門南	瓦	軒丸瓦	20				暗灰	SK01　三ツ巴紋
10	4	2	天守門南	瓦	軒丸瓦	5				灰	三ツ巴紋
10	5	31	天守門南	瓦	軒丸瓦	5				暗灰	三ツ巴紋
10	6	1	天守門南	瓦	軒丸瓦	60		1.6	2.2	灰黄	三ツ巴紋　コビキB　ケズリ風　板ナデ　ハナレ砂
10	7	34	天守門南	瓦	軒丸瓦	5				暗灰	三ツ巴紋
10	8	47	天守門南	瓦	軒丸瓦	5				暗灰	三ツ巴紋
10	9	53	天守門南	瓦	軒丸瓦	5				褐灰	桔梗紋
10	10	49	天守門南	瓦	軒丸瓦	10				灰	桔梗紋
11	11	1	天守門南	瓦	軒平瓦	30			1.4	暗灰	
11	12	44	天守門南	瓦	軒平瓦	20				灰	
11	13	1	天守門南	瓦	軒平瓦	10				灰黄	
11	14	3	天守門南	瓦	軒平瓦	10			2.1	灰	
11	15	8	天守門南	瓦	軒平瓦	5			1.5	浅黄	
11	16	8	天守門南	瓦	軒平瓦	5				灰	
11	17	1	天守門南	瓦	軒平瓦	20			1.8	にぶい黄橙	
11	18	2	天守門南	瓦	軒平瓦	5			1.7	灰	
11	19	2	天守門南	瓦	丸瓦	60			2.4	黄灰	コビキA　横縫い取り　細布目
11	20	27	天守門南	瓦	丸瓦	10			2.0	灰	横縫い取り　細布目
11	21	2	天守門南	瓦	丸瓦	70			2.6	灰	横縫い取り　細布目　穿孔有
11	22	7	天守門南	瓦		?			1.9	灰	
11	23	6	天守門南	瓦	塀瓦	30			1.9	灰	
11	24	4	天守門南	瓦	塀瓦	30			2.0	黄灰	穿孔有
12	25	12	天守門北	瓦	軒丸瓦	5				暗灰	三ツ巴紋
12	26	19	天守門北	瓦	軒丸瓦	10				灰白	九目結紋　表面に銀粉のようなもの有り
12	27	13	天守門北	瓦	軒平瓦	5				灰黄褐～暗灰	
12	28	59	天守門北	瓦	軒平瓦	30				灰白	
12	29	97	天守門北	瓦	軒平瓦	20			2.2	灰	SK11
12	30	98	天守門北	瓦	軒平瓦	10				灰白	
12	31	61	天守門北	瓦	軒平瓦	20			2.0	にぶい橙	
12	32	98	天守門北	瓦	軒平瓦	20				褐灰	
12	33	88	天守門北	瓦	鯱瓦	5				灰	
12	34	76	天守門北	瓦	鯱瓦	5				灰白	
12	35	100	天守門北	瓦	鬼瓦	10				灰	桐紋
13	36	72,98	天守門北	瓦	丸瓦	30		12.6	2.1	暗灰	コビキA　太縄目　横縫い取り　細布目　タタキ有
13	37	17	天守門北	瓦	丸瓦	50		13.0	2.0	灰	コビキA　横縫い取り　細布目　タタキ有
13	38	17	天守門北	瓦	丸瓦	40			2.4	灰	コビキA　横縫い取り　細布目　タタキ有
13	39	12	天守門北	瓦	丸瓦	50			2.1	灰黄	コビキA?　横縫い取り　細布目　タタキ有
13	40	18	天守門北	瓦	丸瓦	30		16.0	2.5	灰	コビキA　横縫い取り　粗布目　タタキ無
13	41	10	天守門北	瓦	丸瓦	30			2.2	浅黄	横縫い取り　細布目　刺突有　刺突出現初期例
13	42	22,13	天守門北	瓦	丸瓦	60		15.0	1.9	灰白	縦縫い取り　細布目　タタキ有　格子目タタキ
13	43	17	天守門北	瓦	丸瓦	50	28.9		1.6	灰	コビキB　粗布目　刺突有
14	44	57	天守門北	瓦	平瓦	20			2.0	灰	
14	45	16	天守門北	瓦	塀瓦	20			1.9	黄灰	
14	46	10	天守門北	瓦	塀瓦	20			1.8	暗灰	
14	47	16	天守門北	瓦	塀瓦？	30			2.0	黄灰	
14	48	17	天守門北	瓦	塀瓦	40			2.4	黄灰	
14	49	14	天守門北	瓦	塀瓦	20			2.0	暗灰	
14	50	24	天守門北	近世陶器	鉄釉皿	20				赤褐/黒	反転有　器高1.8cm　口径10.6cm
14	51	90	天守門北	鉄製品	釘	70	6.2	2.6			直径0.7cm
14	52	21	天守門北	銭貨	洪武通宝		2.4	2.4	0.1		
14	53	20	天守門北	銭貨	不明		2.3	2.3	0.2		北宋銭か?
16	54	206	富士見櫓	瓦	軒丸瓦	30				灰	三ツ巴紋
16	55	216	富士見櫓	瓦	軒丸瓦	5				灰	三ツ巴紋
16	56	206	富士見櫓	瓦	軒丸瓦	10				灰	三ツ巴紋
16	57	210	富士見櫓	瓦	軒平瓦	10				暗灰	
16	58	207	富士見櫓	瓦		10				灰	穿孔有
16	59	209	富士見櫓	瓦	丸瓦	60		13.8	2.0	灰白	コビキB　粗布目
16	60	210	富士見櫓	瓦	丸瓦	90	28.3	14.7	1.7	黄灰	コビキB　粗布目　刺突有 ハケメ風
16	61	210	富士見櫓	瓦	平瓦	40			2.0	灰	
16	62	211	富士見櫓	瓦	雁振瓦	30			3.1	灰	コビキA　縁辺近くに一部布目有り
17	63	210,214	富士見櫓	瓦	塀瓦	40		29.6	2.4	暗灰	
17	64	204	富士見櫓	瓦	塀瓦	20			2.1	淡黄	
17	65	210	富士見櫓	瓦	塀瓦	30			2.0	暗灰	
17	66	210	富士見櫓	瓦	塀瓦	40			2.0	灰	
17	67	202	富士見櫓	瓦	塀瓦	40			2.0	暗灰	
17	68	205	富士見櫓	瓦	鯱瓦	10			1.7	灰	鋭利な工具で段差表現　ハナレ砂顕著
17	69	211	富士見櫓	瓦	鯱瓦	10?			2.4	暗灰	
17	70	213	富士見櫓	鉄製品	環状金具		6.3	6.3			径0.65cm　表土層
17	71	212	富士見櫓	鉄製品	釘		4.5	1.8			北側落ち込み　直径0.6cm

付　図

浜松城跡石垣実測図

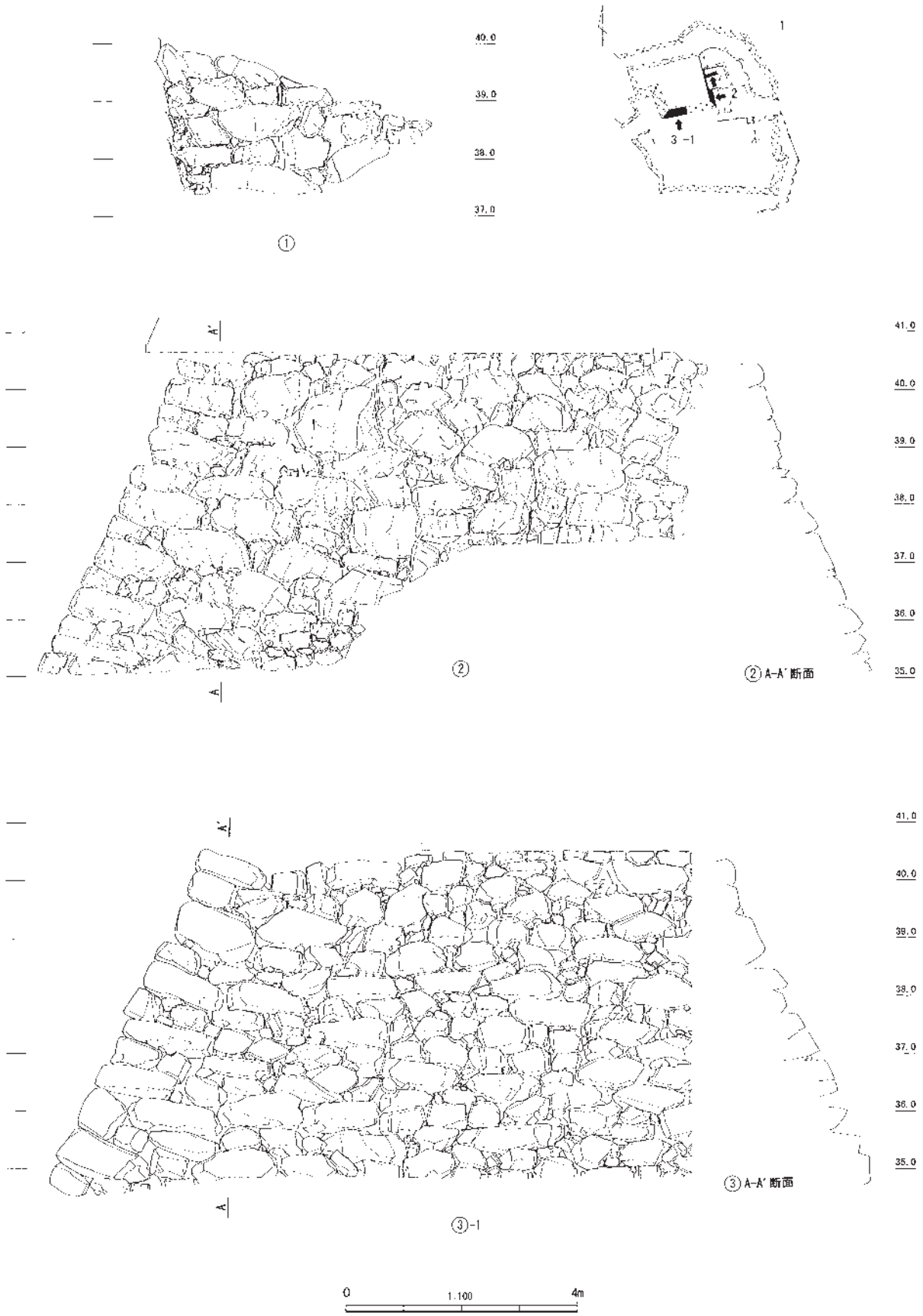


Fig.21　浜松城石垣実測図（1）

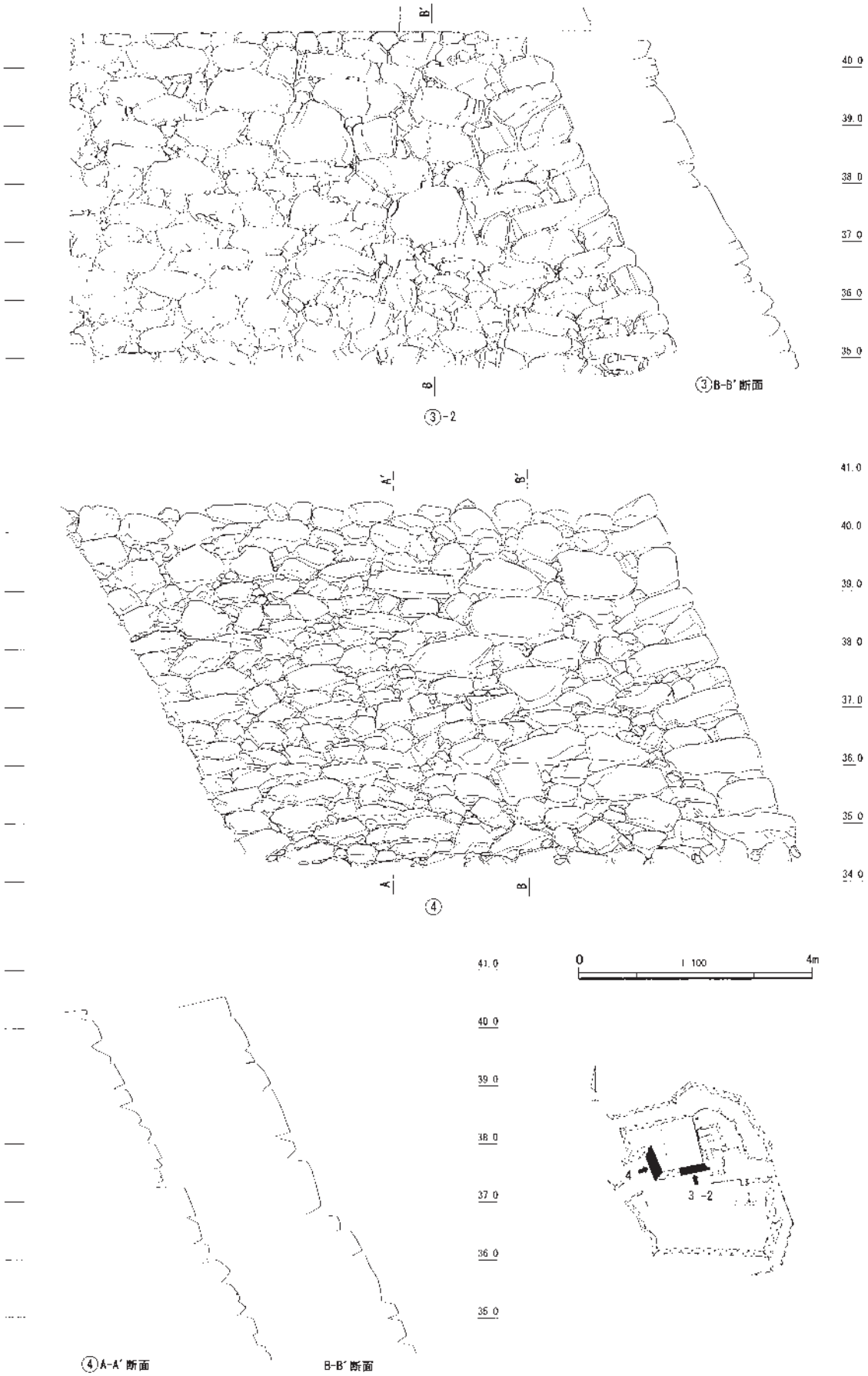


Fig.22　浜松城石垣実測図（2）

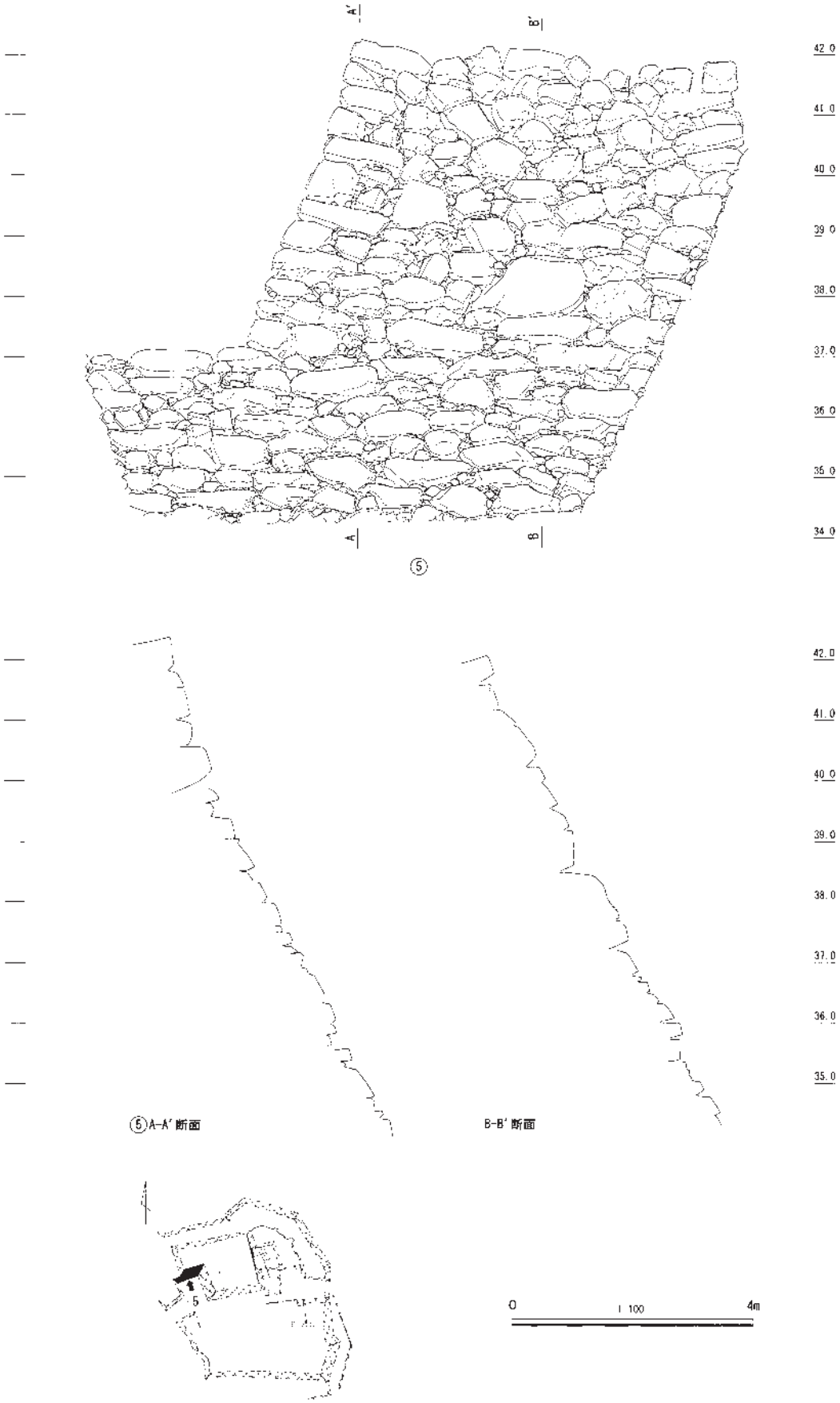


Fig.23　浜松城石垣実測図（3）

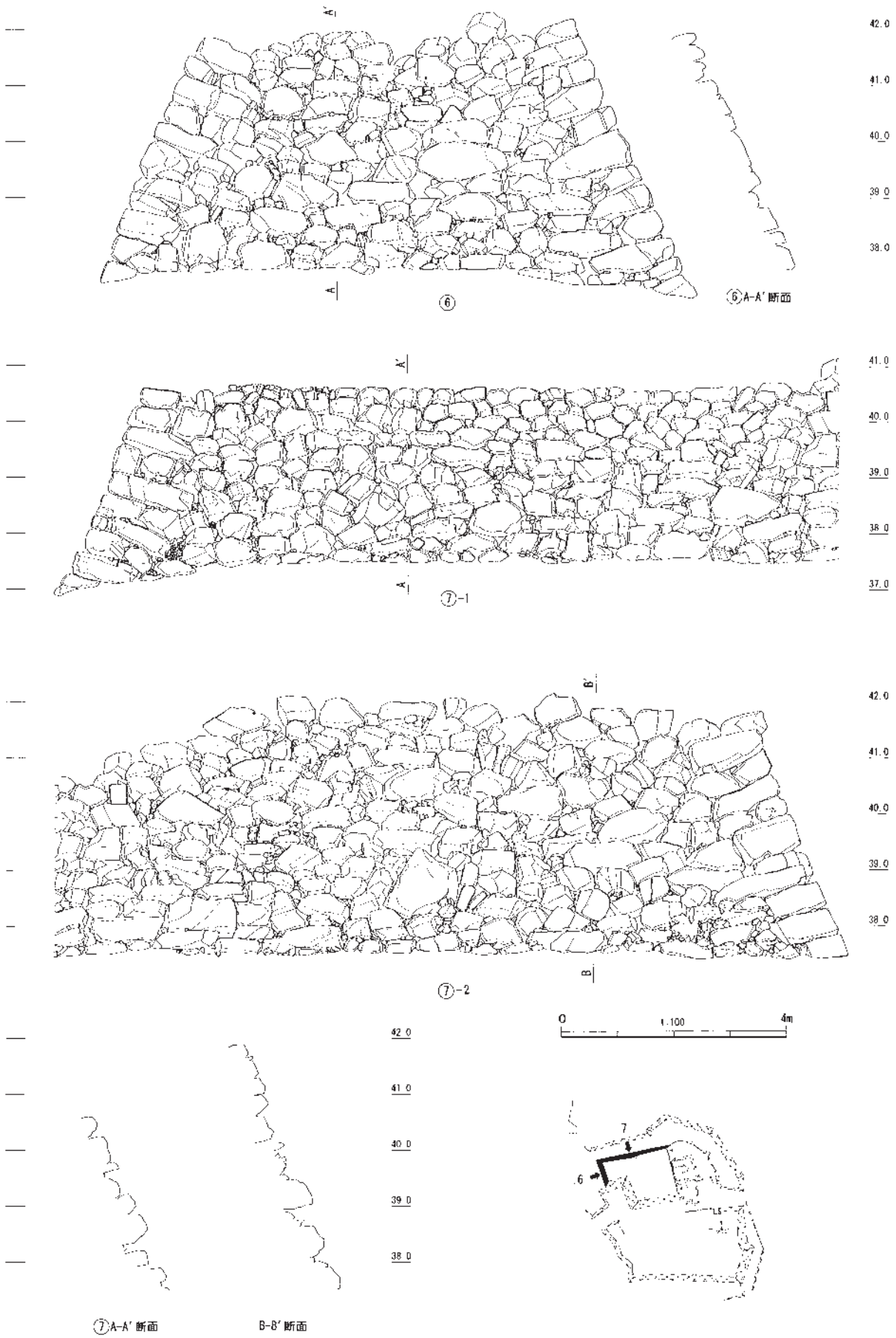


Fig.24　浜松城石垣実測図（4）

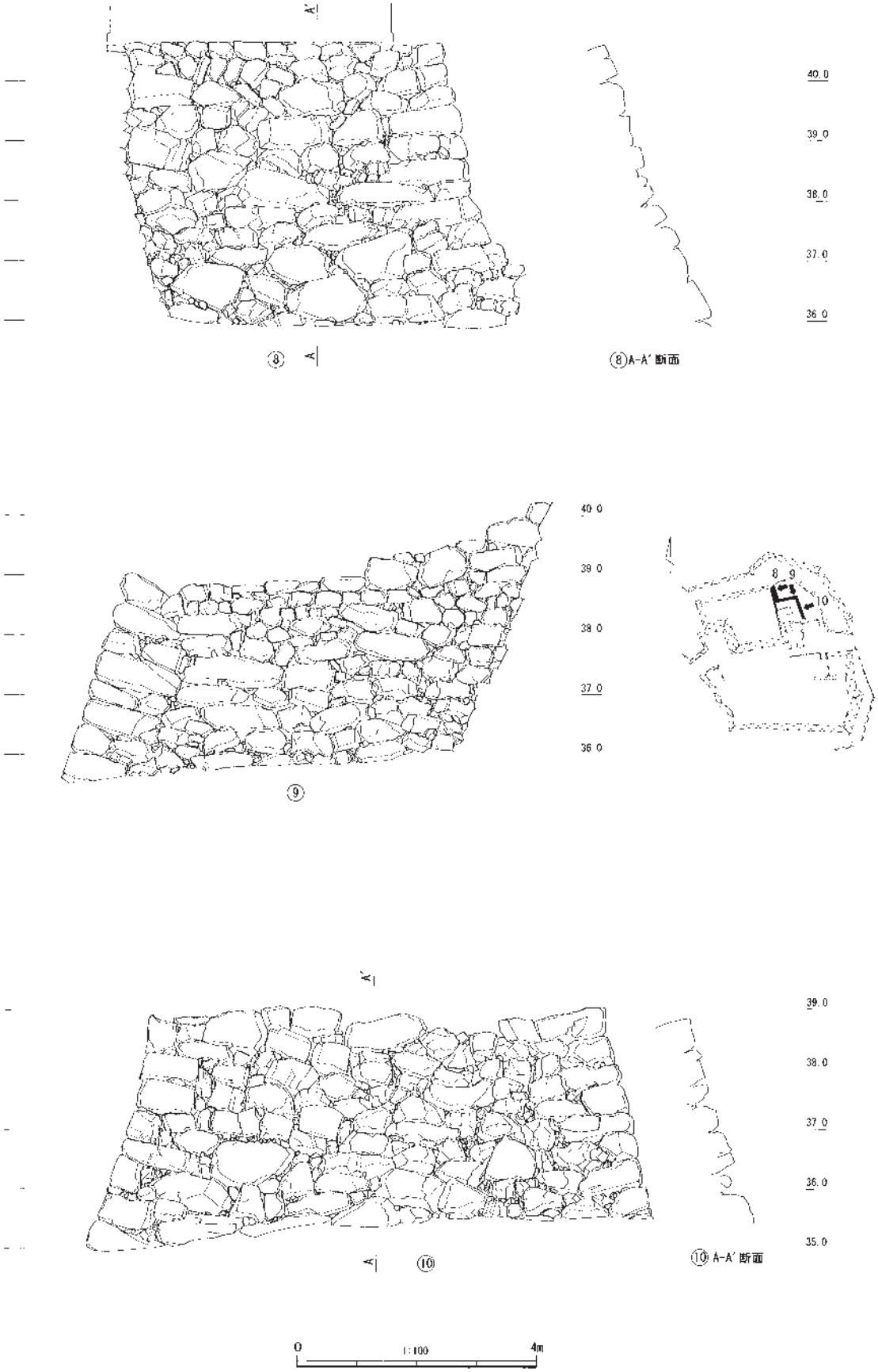


Fig.25　浜松城石垣実測図（5）

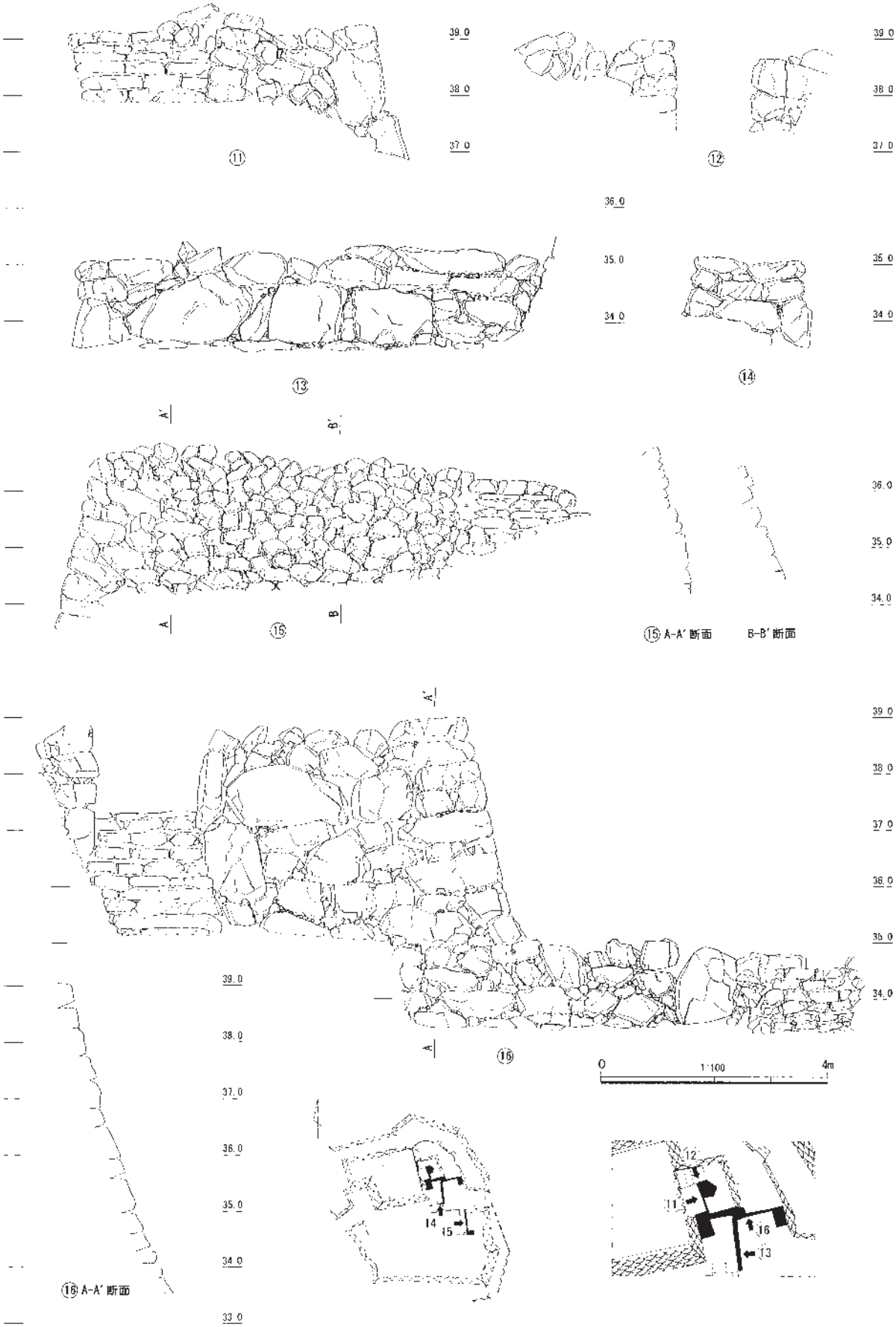


Fig.26　浜松城石垣実測図（6）

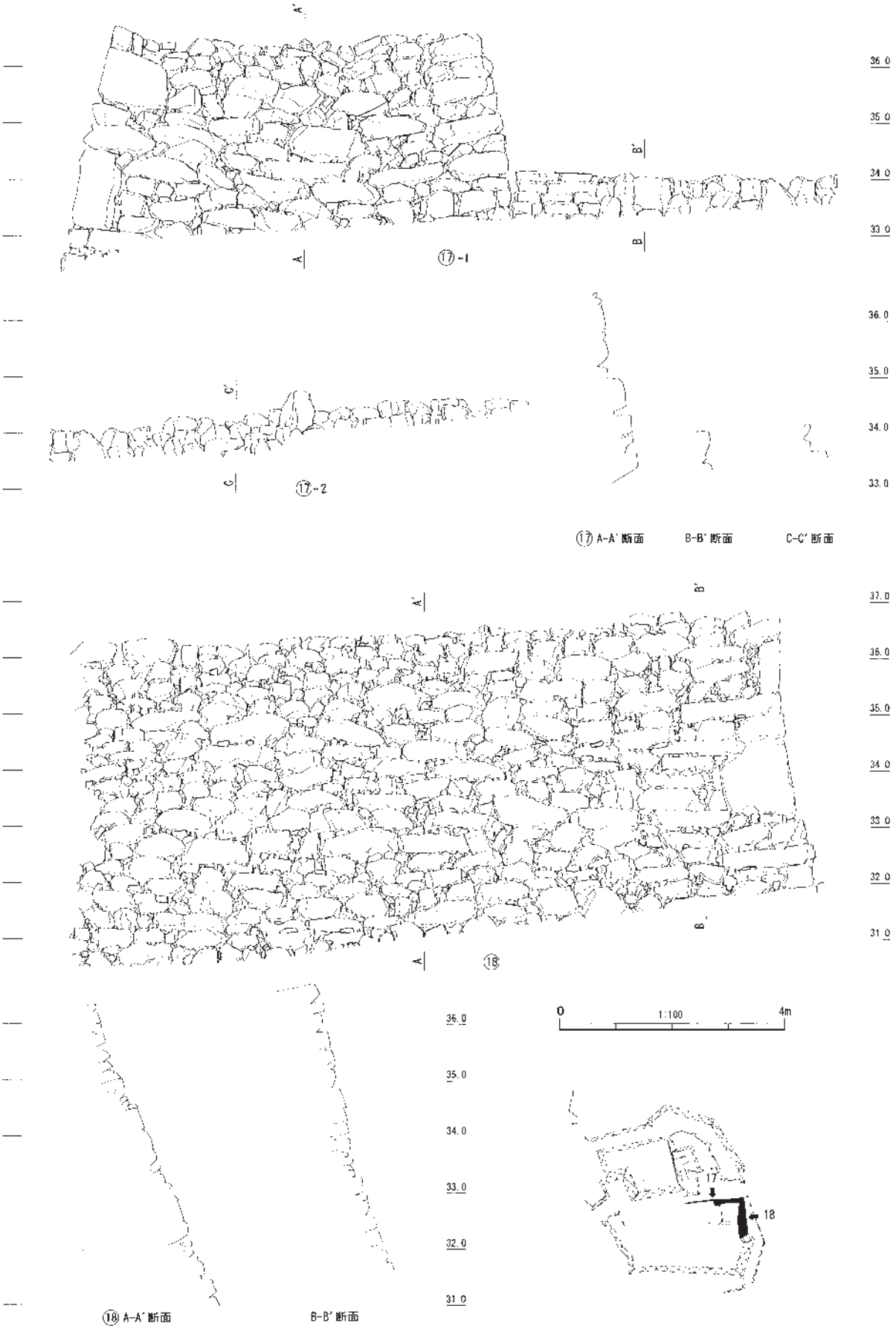


Fig.27　浜松城石垣実測図（7）

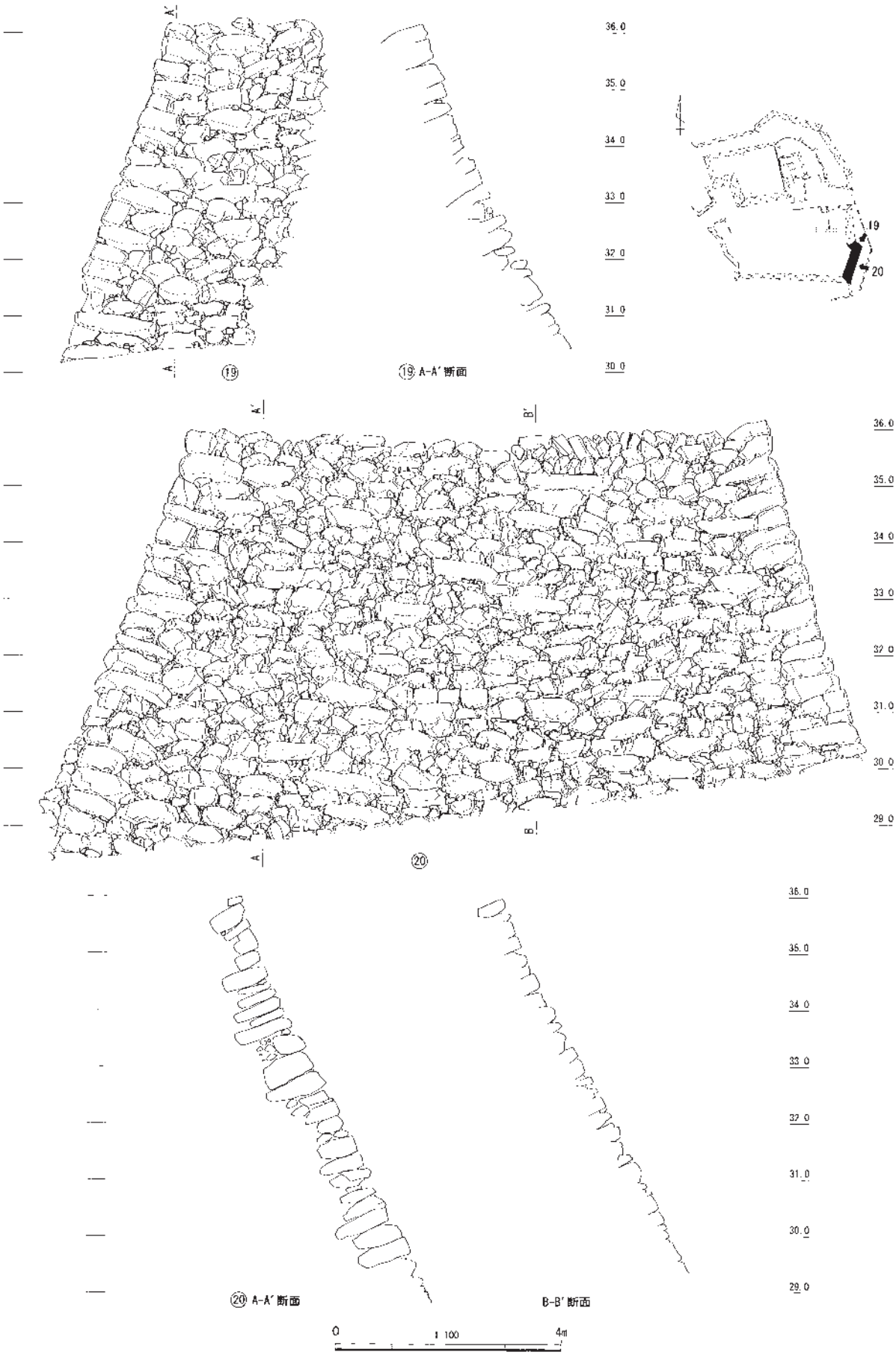


Fig.28　浜松城石垣実測図（8）

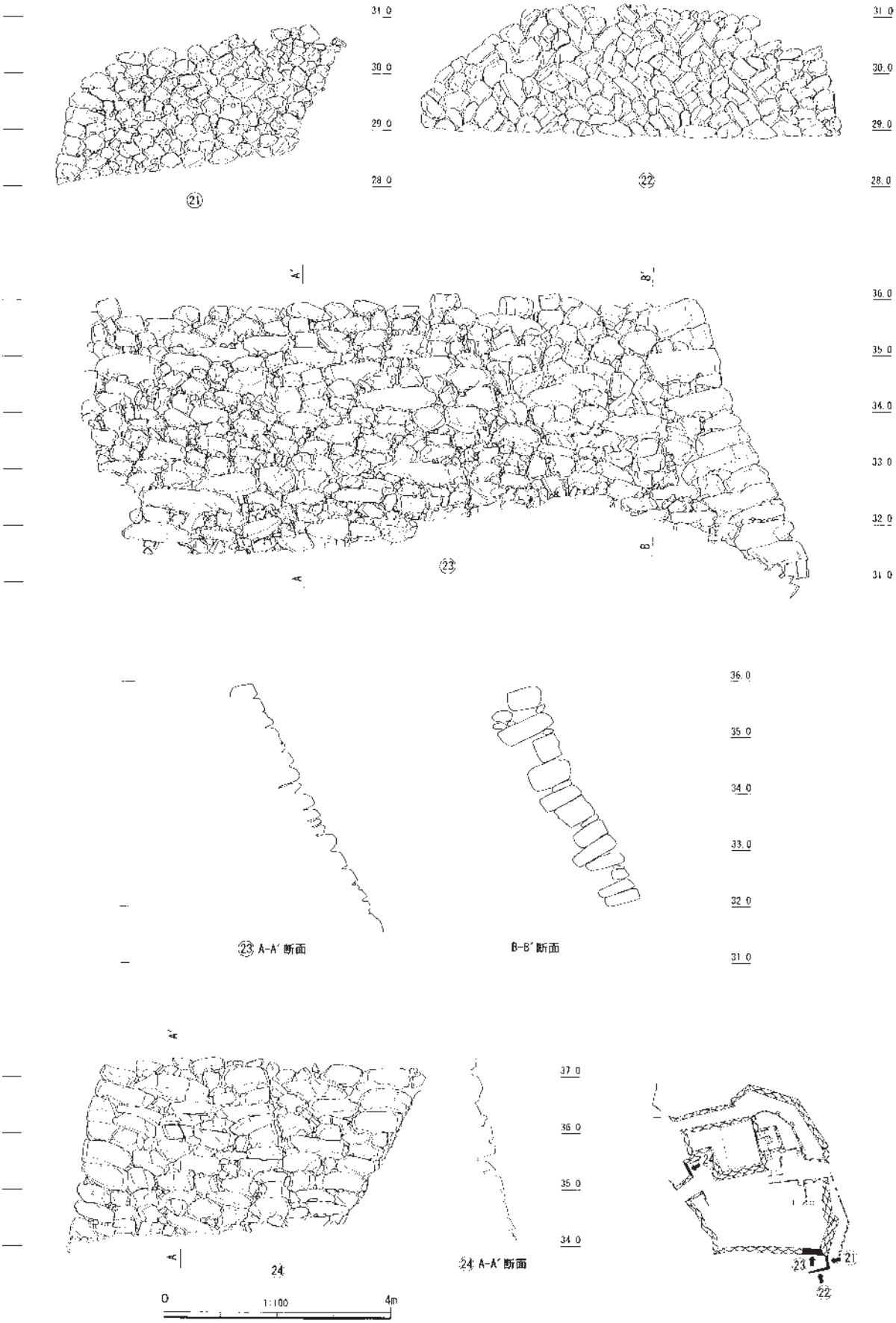


Fig.29　浜松城石垣実測図（9）

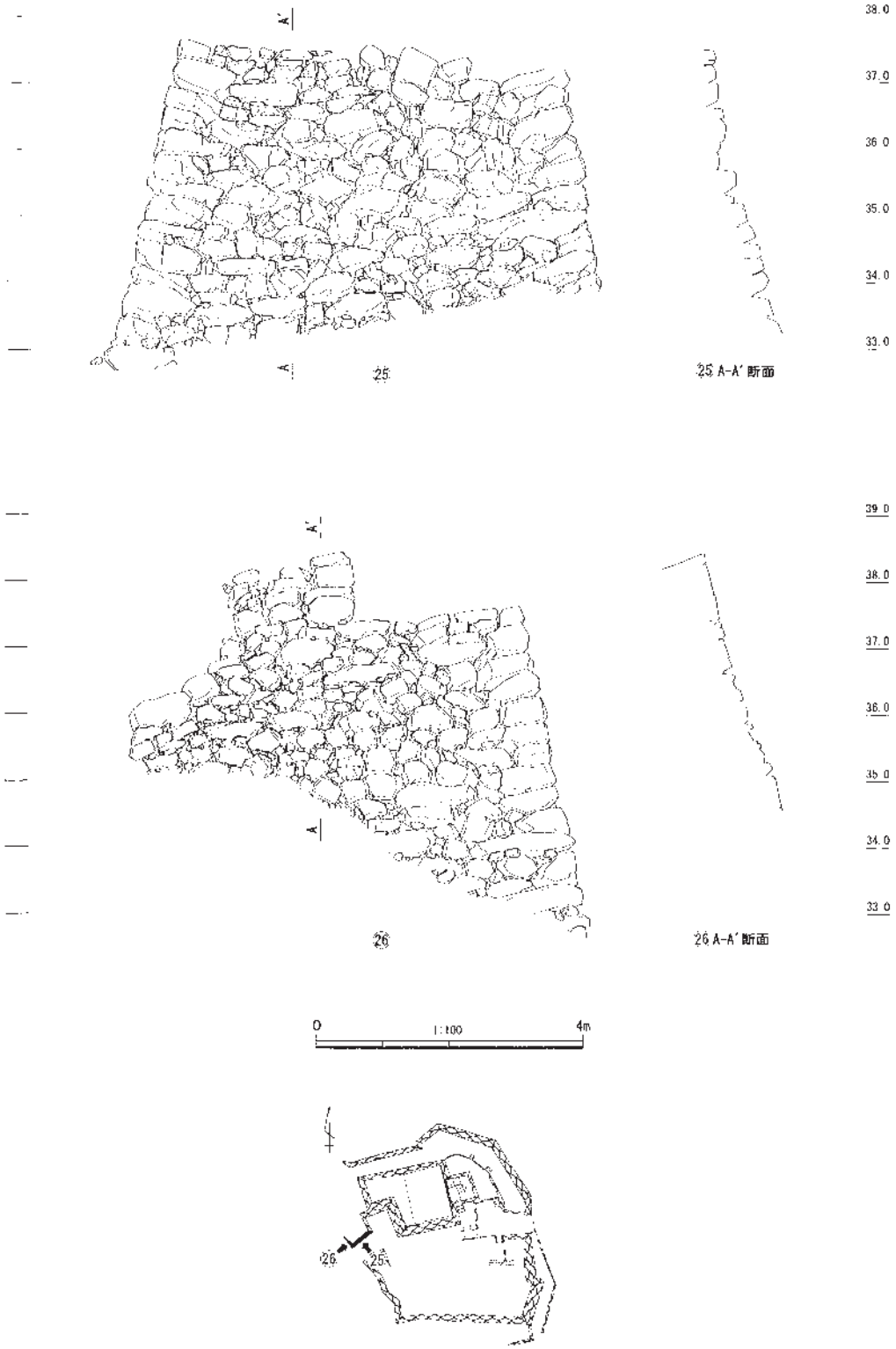


Fig.30　浜松城石垣実測図（10）

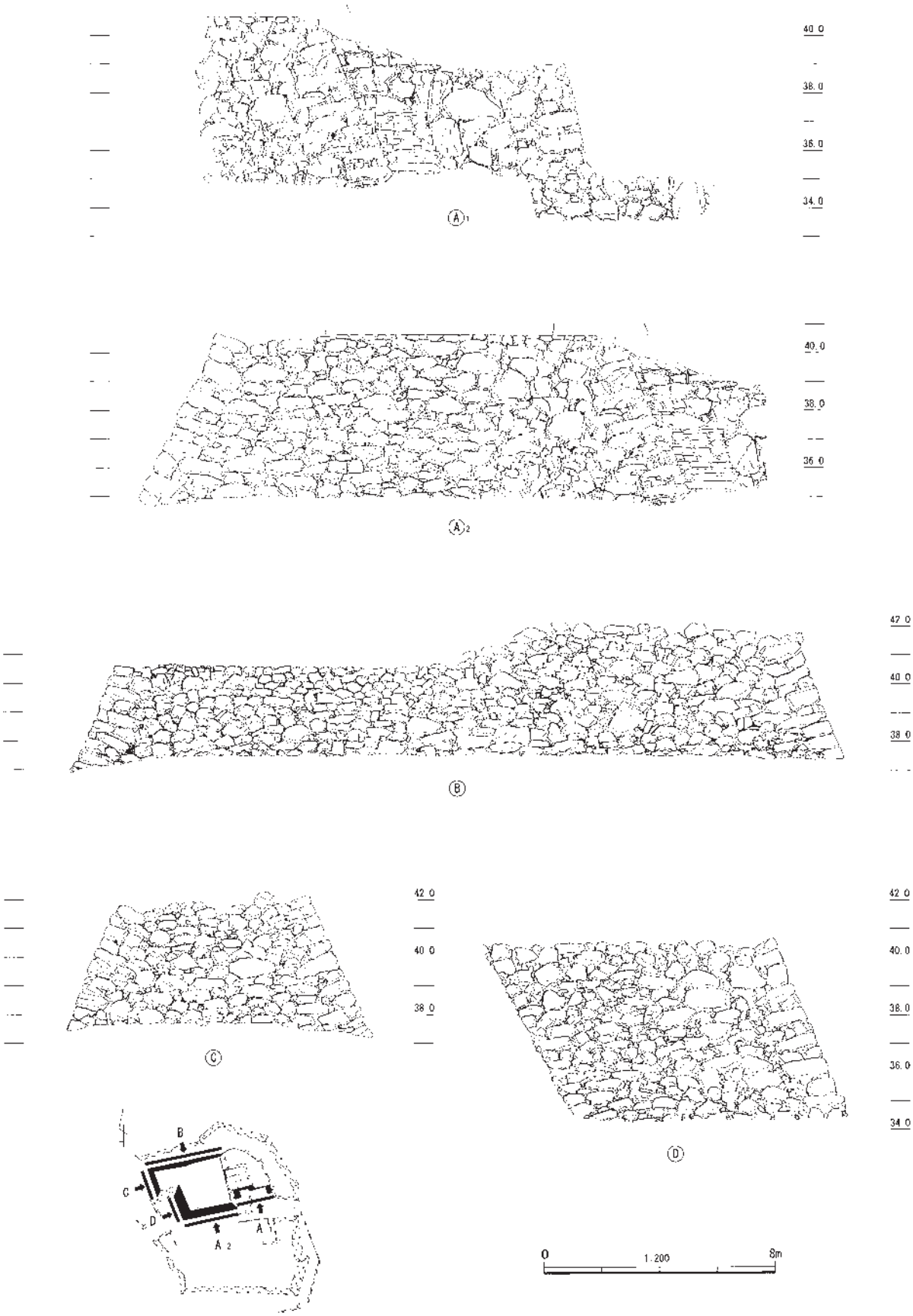
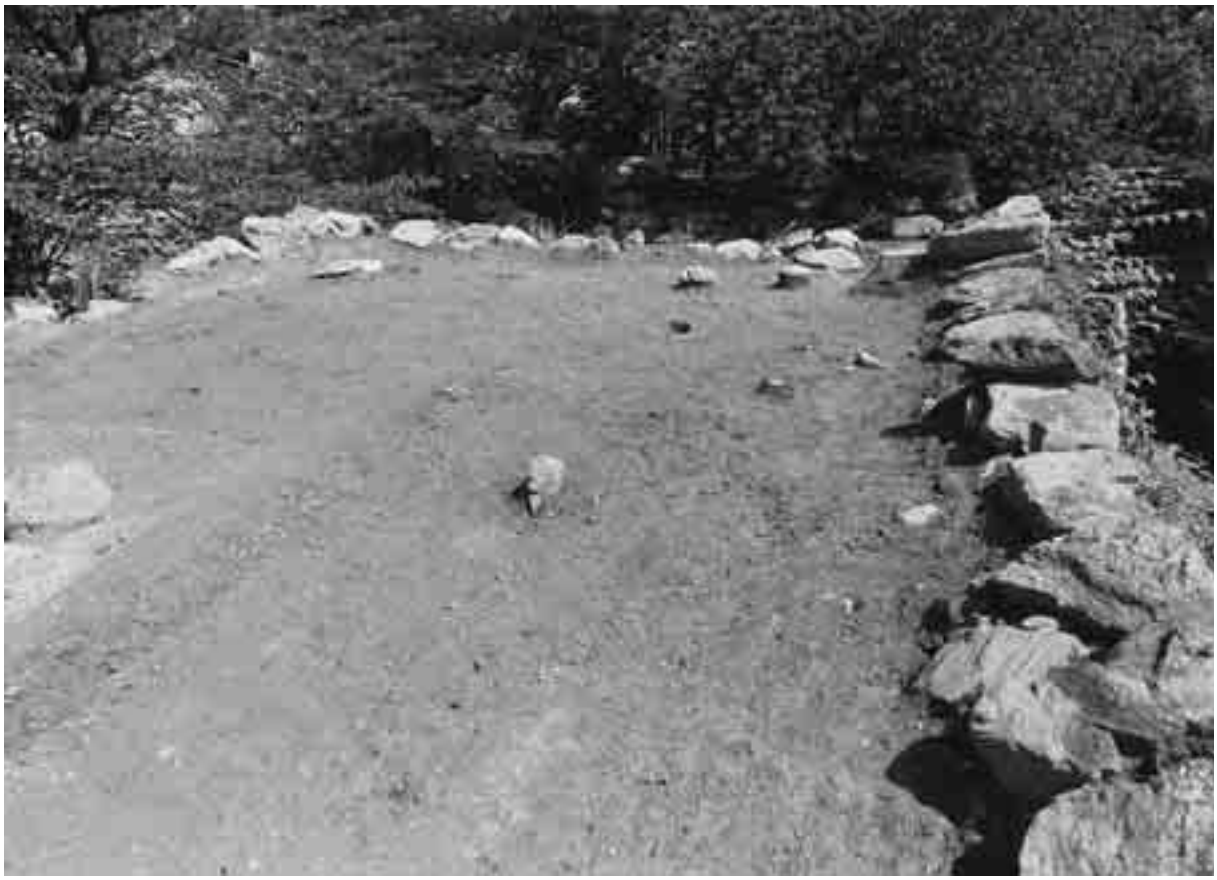


Fig.31　浜松城石垣実測図（11）

図　版

PLATE

天守門跡北地区（北西から）



1　天守門跡南地区（南から）

2　天守門跡南地区根石列（南西から）

3　天守門跡南地区根石列（北東から）

1　天守門跡北地区（北から）

2　天守門跡北地区根石列（西から）

3　天守門跡北地区遺物出土状況（北から）

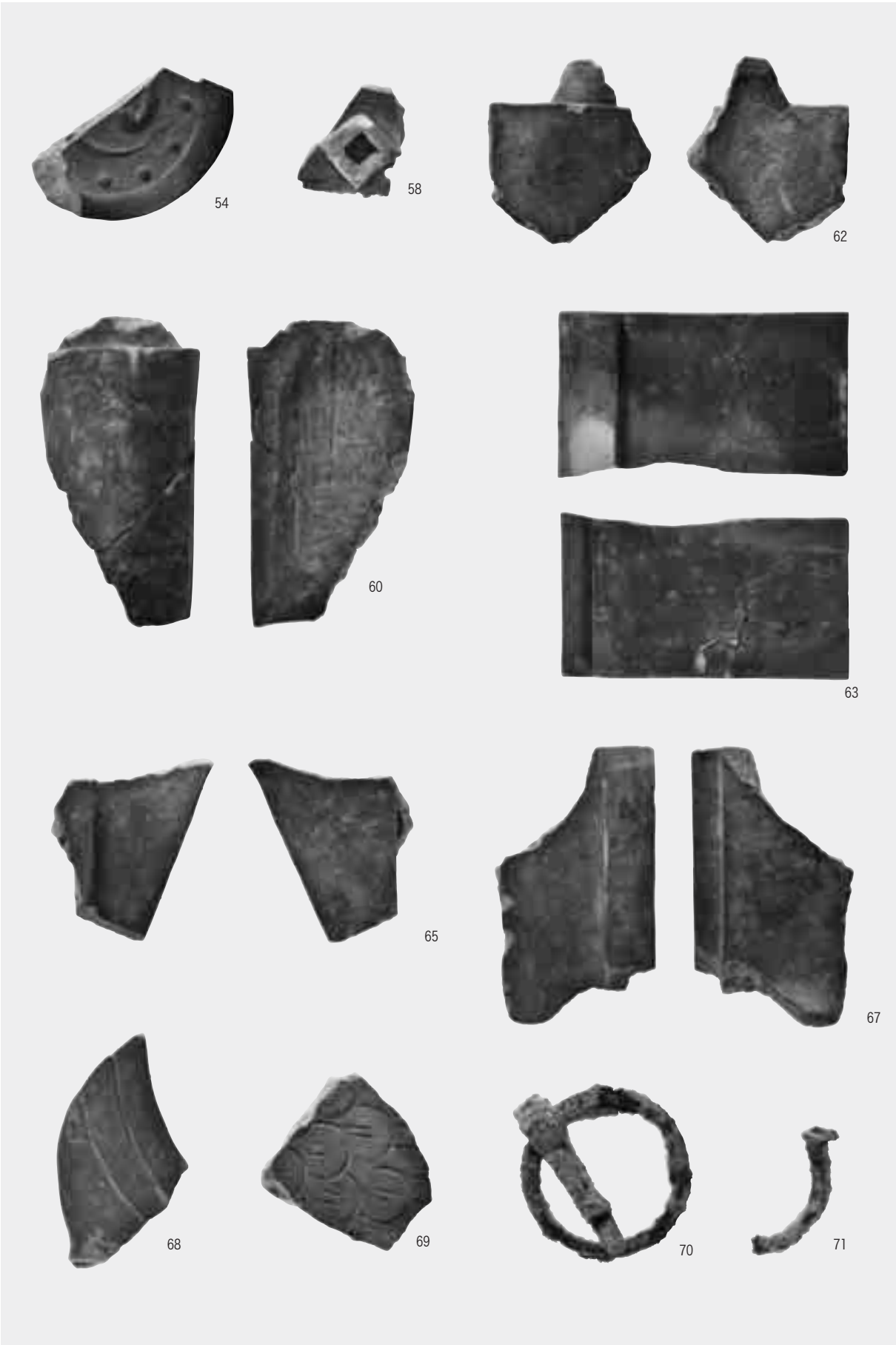
PL.4

天守門跡完掘状況（南から）

富士見櫓跡北側石垣（西から）

PL.6

天守門跡出土遺物



富士見櫓跡出土遺物

報告書抄録

書名（ふりがな）	浜松城跡５次　（はままつじょうあと５じ）
編　著　者　名	鈴木　一有
編　集　機　関	浜松市教育委員会 〒430-0929　浜松市中区中央1-2-1　イーステージ浜松オフィス棟 浜松市生活文化部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-0946　浜松市中区元城町103-2 TEL（053）457-2466　FAX（053）457-2563
発　行　機　関	（財）浜松市文化振興財団
発 行 年 月 日	2011年３月10日

ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はままつじょうあと 浜松城跡	静岡県 浜松市中区 元城町	22202	01- 04- 13	34度 47分 30秒	137度 45分 15秒	2010年 ５月17日 ～ ６月11日	85㎡	範囲確認 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	特記事項
浜松城跡	城跡	安土桃山時代 江戸時代	施釉陶器 瓦	天守門の櫓部分の根石列、富士見櫓北側の石垣を確認

浜松城跡５次

2011年３月10日

編集機関　浜松市教育委員会
浜松市生活文化部文化財課
（教育委員会の補助執行機関）
〒430-0946　浜松市中区元城町103-2
発行機関　財団法人　浜松市文化振興財団
印　　刷　松本印刷株式会社

Hamamatsu Castle

The 5th excavation report

A Report of Archaeological Investigations on 16th-19th Century Castle in Western Shizuoka, Japan

March, 2011

Hamamatsu Cultural Foundation